かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 121 号

平成17年10月14日

編集　旭川医科大学
　　教務・厚生委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

世界遺産羅臼町と遥かなる国後島　（写真撮影：学生課）

新入生を迎えて……八竹　直……2
〃……山内一也……3
〃……木村昭治……4
平成17年度医学科入学者名簿……5
平成17年度看護学科入学者名簿……6
平成17年度看護学科第３年次編入学者名簿……6
旭川医科大学に入学して……青木亜美……7
〃……稲和幸大……7
外国人留学生在籍者一覧……8
平成17年度大学院入学者名簿……8
盛大に「医大祭2005」実施……8
授業評価の公表……9
寄稿（チュートリアルⅡ）……吉田貴彦……37
教授紹介……千石一雄……39
〃……柿崎秀宏……40
助教授紹介……程塚　明……41
助教授紹介……濤川一彦……41
〃……黒田　緑……41
〃……伊藤博史……42
〃……山下　剛……42
〃……橋本　博……42
平成17年度学生団体一覧……43
新入生合同研修会実施される……44
成績優秀者の表彰式……44
平成16年度学位記授与式……45
平成17年度入学式……45
博士学位記授与式（６月期）……45
授業料未納による除籍について……45
学生等のセクシュアル・ハラスメント相談員……45
平成16年度卒業生の動向……46
教員の異動……48
窓外……川村祐一郎……48

新入生を迎えて

旭川医科大学長　八　竹　　直

入学者選抜の難関を突破し、本学に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。私どもは心から祝福し、歓迎いたします。医療にかかわって、病に苦しむ人たちのために役に立ちたいという高い志をもって医師や看護師の道を選ばれた皆さんに深く敬意を表しますとともに、今後ともその志を忘れず、自分自身を切磋琢磨していかれることを心から願っています。

この旭川医科大学は一昨年創立30周年の節目を迎えましたが、昨年４月からは国立大学法人が運営する医科大学として新しい組織で、気持ちも新たに、再出発をしたところです。

大学の運営は法人組織になりましたが、当大学の教育理念が変ったわけではありません。その理念を要約しますと、まず地域医療に貢献する医療人を育てること、患者の苦しみを理解し、その改善に最善を尽くせる医療者を育むこと、患者の人権やQOLなどについての高い生命倫理観を持った医師及び看護職者を育成することを挙げています。また医学･看護学に関する最先端の高度な研究を行うため、優れた研究者の養成に努めること、さらに、医学･看護学の教育･研究及び医療活動を通じて国際社会との連帯を深め、その発展に貢献する事を掲げています。これらの理念に則った教育をするために、この数年色々と教育改革を行ってきました。すなわち医学科では個別の系統講義を少なくして統合科目中心の教育を行うと共に、主要臨床科目中心のコアカリキュラムを導入しました。

また共用試験やオスキーの実施、さらには早期体験実習やチュートリアル教育を始め、僻地医療実習や診断・治療のチームに参加するクリニカル・クラークシップ制の臨床実習も実施しています。これらの変革の目的は６年の間に高度先進医療を理解し、さらにその知識を発展させる高度な専門教育を行う一方、社会から求められている「ありふれた疾患をきちんと診断・治療し、緊急事態に対処できる医師」を育てる事にあります。

また医師は学生時代に学んだ知識だけで、長期に亘り医療人として仕事を続けることは出来ません。すなわち最近の医学は目まぐるしく進歩発展しています。医師はこれらを生涯にわたって、自主的に学び続けなければなりません。その学び続ける習慣を身につけるためには学生時代から自主的に問題点を見つけてそれを解決する問題解決型の勉強方法を身につけることが必要になります。

さらに、最近しばしば報道されている不幸な医療事故を防止するためにも、社会からは医学知識の伝授と同じ位、基本的且つ実際的な医療の教育に重きをおくべきだとの要望が強くなっています。従ってレベルの高い臨床教育が必要なのです。

看護学科も平成14年度からカリキュラムが改められ、統合科目の導入や看護技術の習得に重きがおかれています。これらの改革は看護専門職として現在の医学の進歩を理解しつつ、それに合った高いレベルの看護の質を維持しつづけることが要求されているからに他なりません。

このような教育改革をしましても、大学の授業時間内で学べる部分は医学・看護学のほんの一部にしか過ぎません。その裾野に広がる多くの知識は自ら学びとらなければなりません。さらに医療者としては、人間としての在り方や生き方に関して深く考え、自分自身の人間性を高めると共に他人に対し深い思いやりの心を持つことが要求されます。このためには大学生活の間に、広い範囲の読書や社会活動等を通して、広く深い教養を身につけることが必要になります。

いずれにしても21世紀の医療を担われる皆さんが本学において「心」と「知識」と「技能」を大いに磨かれることを心から祈っています。またそれを成就させるために「健康」や「事故」にはくれぐれも気をつけて旭川医科大学での生活を過ごしていただきたいと願っています。

医学科の新入生を迎えて

医学科第１学年担当　山　内　一　也

新入生の皆さん、入学おめでとう。長く厳しい受験勉強からの解放を心地よく味わっていることでしょう。大空の下にくっきりと白く輝く大雪連山の峰々さえも皆さんの門出を祝福しているかのように感じられることでしょう。これからの自分の将来に大きな希望を抱いていることと思います。

しかし、山の彼方が見えぬようにどこか漠然とした不安の入り混じった心境にもあるのではないでしょうか。医学をただ単に学問として修めるのではなく、一人の医者として患者に接し、ときにはその患者の命をも預かるという立場に立つのですから、やりがいのある仕事としての期待と、自分はそのような医者になり得るであろうかと言う不安が入り混じるのは当然でありましょう。

入学された皆さんが最初に学ぶ主たる内容は、生物学、化学、物理学、統計学等の分野になります。医学はこれらの自然科学を基礎として成り立っている学問であります。日進月歩する医学の本質を理解するためにも、先ずこれらの分野をきっちりと固めておく必要があるでしょう。高等学校の時とは比較にならないくらい膨大な量の知識を頭に入れなければならないでしょうが、これらの分野を学習するにあたっては、木を見て森を見ない式の学習にならないように注意すべきです。自分が今どのような森の中を歩いているのかを常に心掛けながら学習することが大事でしょう。講義内容あるいは学習の仕方などに疑問が生じた場合には先生のところに行くことを薦めます。医大の先生は相談に来た学生には親切なのです。

皆さんは、上に述べた自然科学分野と同時に、哲学、心理学、社会学をはじめとする、人文科学、社会科学分野も学ぶこととなります。医学は接する相手が人間であるが故に自然科学としてとらえるだけでは不十分であります。そこに医者としての遣り甲斐があると同時に難しさがあります。人間あるいは人間社会を研究対象としている分野が人文科学、社会科学です。勿論これらの講義を学んだからといって、皆さんの人間理解が急に深まるわけではありません。これからの一生涯を通じて多くの人に接する中で皆さん自身がその内容を肉付けし己自身の血肉としていくべき課題です。我々の先輩たちがどのように人間を観察し、理解してきたのかを大いに学び取って下さい。本学は必ずしもこの分野が充実しているとは言えませんが、この分野の本等を先生に推薦してもらうのも良いでしょう。比較的時間にゆとりのある１年生の時期にじっくりと本を読むのも良い経験です。

皆さんの大学生活の主要部分が学業にあることは当然でありますが、もう一つ大事なことは友人と語り、遊ぶことです。孤独にならない事です。多くの人たちはサークル等に入り先輩たちとの交わりの中で徐々に大学生活にも慣れていくことでしょう。一つくらいサークルに入るのも良いことです。医学部は卒業生の殆んど全てが同一の職業につくという特殊な学部です。そのため、お互いに助け合う気持ちは他学部生よりも強いようですが、その反面唯我独尊的態度に陥る危険性があります。特に本学は単科大学ですので異なる学部の多様な学生達と交わる機会も多くありません。サークル活動等を通じて他大学の学生達と交わり、大いに語り合うのもよいでしょう。

本学の教育理念の１つに「高度な実践的臨床能力を有し、高い生命倫理観を有する医師の育成」があります。これは私の気に入っている言葉 A Cool Head + A Warm Heart に相い通じるものがあります。

６年間の学業を習得し、さらに医療現場で実践を積み重ね、さらにプラスαを身につけた、花も実もある医師となるであろう皆さんに大いに期待しています。

この原稿は５月のゴールデンウイークの頃に書いたものです。

新入生を迎えて

看護学科第１学年担当　木　村　昭　治

夏休みも過ぎ定期試験も経験した今、皆さんが抱いていた大学生活のイメージは実生活と合致していますか。また入学に向かって努力していたあの頃、面接試験では、地域住民の役に立ちたい、科学的根拠に基づいた看護や患者の視点に立った看護を学びたいなど熱く語ってくれた皆さんはまだいますか。不景気時には手に職をという感覚で志望された方もいたでしょう。いずれにでよ皆さんは旭川医大を希望し、選ばれて本学に入学してきました。皆さんの数倍の同世代の仲間が受験しながらもその希望をかなえることができませんでした。加えて希望しながらもなんらかの事情で大学進学をあきらめざるを得ない高校生もいたことでしょう。これらを考慮すると皆さんは彼らや彼女たちの分まで努力して目標を達成する義務があります。初心を忘れずこの４年間を精進していただきたいというのがまず第一の願いです。

さらに皆さんへの個人的な希望を述べさせていただきます。釈迦に説法的なところはお許し願います。

まずプロ意識の形成であります。私は昨今のいささか奇妙な人道主義に違和感を覚えるものです。例えば新聞の休刊日というのがあります。この分野に関わっている人には申し訳ないが私にとってはプロ意識の欠落としか言いようがありません。配達員への配慮？それを理由に丸一日休んでもいい職種なのかと思ってしまいます。世の中にはこの手の説得力に欠ける「プロフェショナル」が蔓延しています。以前はそれを修正する力が働きましたがその力そのものが向こう側に行ってしまって手のつけようがありません。少数派はただぼやくのみです。医療職は「プロフェショナル」の最たるものの一つです。これには誰にも異論はないでしょう。プロであることの条件は何かというとまずその意識を持っているや否やということであります。では我々におけるプロ意識とは何かということでありますが私は「職に殉ずる、total devotion」だと思っています。priorityの一番目に働くことをもってくることなのです。欧米に準じてかどうか知らないが、日本においても最近では、人生を楽しむための糧を稼ぐ目的で働く、という姿勢に共感する人が増えているように思います。それを全く否定するものではありませんが、そういう人達の職種と医療は明らかに違う。そこには命が存在しているからです。「命」に対しては我々としては「殉ずる」ことでしか対応できないのではないでしょうか。

このことを念頭において次の段階に進みます。

医科大学に入学した時点で皆さんの方向はほぼ決定づけられました。その方向に沿っての努力を続けるわけですが勉学する上での基本は問題点を抽出する能力、さらにそれらを解決する方法を見出しかつ実行する能力を養うことでありましょう。（旭川医大のアドミッションポリシーです。）従ってまず方法論や手段を学ぶのであって知識の量を増やすのみに時間を費やすべきではありません。これはどの分野にもあてはまる当たり前のことであって、その極めて当たり前のことを習得したものを一人前とよぶならば我々の使命は卒業時に皆さんが一人前になっているように鍛えることに他なりません。一人前といえば技術の習得も必須の要件です。医療系の大学は学問を修めると同時に特別な技術の習得という職業訓練所のような面もあります。運動部の方はよくお分りのように、技術は各人のもともとのセンスが大きく影響しますがトレーニングによりうまくなるものです。

基本的な学習目標は以上に尽きると思いますが、さて各論はというと「何故」を貫き通せばよいと思います。そして科目習得のコツはその中にどっぷり浸かるということでつまりそれが日常化するということです。歯磨きの仕方や食事の仕方を誰も忘れないことと同じです。この時重要なのは、試験では部分点というものがあってそのかき集めで合格ということがあり得ますが（入試では、捨て問を見極めることが重要などと聞いた事があります）医療の現場ではそれは許されないこともあるということです。満点でなければ助からない場合もあるでしょうし、部分点で満足できないのは自分や家族が患者であると想定するとよく分かるでしょう。

大学では勉学の場とともにそれ以外の場においても様々なひとと触れ合う機会があります。教室や実習場所、クラブ活動やアルバイト先、４年間は短いですがたくさんの人と出会います。この中には生涯の友になったり、在学中は言うに及ばず、卒後色々な分野に進んだ仲間に助けられたり、助けたりと交流は続くと思います。これが最も重要かもしれません。

この４年間はいわば皆さんの人生の基礎であり、従って徹底的に鍛える必要があります。冒頭に述べたようにそうしなければならない義務があるのです。武田鉄矢のおふくろさんの言葉にもあるでしょう。「こら鉄矢、華の旭川医科大学にはいったからにゃ、勉強せい、勉強せい。勉強して、勉強して勉強し抜け。ちょっとでもさぼりたいとか休みたいとか思ったら、その時ゃ○○。」とね。

４年後の皆さんの姿に期待しています。

平成17年度 旭川医科大学入学式

平成17年度 旭川医科大学入学式

旭川医科大学に入学して

医学科第１学年　青　木　亜　美

旭川に来て、半年が過ぎようとしています。入学当初は慣れない土地での新しい生活に不安を抱いていました。今振り返ってみると、そんな不安はいつの間にか薄れ、毎日が見ることも体験することも新鮮なことばかりで充実した日々を送っています。

医師を目指してこの地に来た以上、勉強は頑張ろうと思っていました。この大学には同じ志を持っている仲間がたくさんいます。そんな仲間たちと切磋琢磨しながら、一緒に勉強することで刺激を受けますし、チュートリアルを通してもっと知りたい、学びたいと思うようになりました。一般教養の中で時に垣間見られる医学に関することがおもしろくて、モチベーションが高まっていくのを感じています。

今、私にはもう一つ打ち込めることがあります。それは、部活です。正直、大学でこんなに熱心に部活をするとは思ってもいませんでした。練習はキツイな、と思うときもありますが、練習し続けるうちに、体力的に強くなっているとともに、精神面でも成長できているというのが、自分でも感じられます。先輩方や同級生とのお喋りが何よりの楽しみであり、かつ心の支えでもあります。部活では授業からは学べないことをたくさん学ぶことが出来ます。

勉強だけでなく、部活を通して人間性を高めることも医師になる上で非常に大切だと思います。これからの大学生活では、今まで築いた人間関係を大切にして、さらに新しい人間関係を築いていきたいです。そして自分の理想とする医師像に近づいていけるようますます成長していきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第１学年　稲　和　幸　大

三月、後期の発表日。その日は朝七時ごろに起きてしまいました。前期の試験では不合格、さらに後期の面接も失敗したところばかり思い出してしまい、「不合格だろうな」と思っていました。しかし希望というものは持ってしまい、前日はまともに眠れず、当日は朝早く起きるという始末です。終いにはとてもそわそわしており、時計ばかり確認している状態でした。発表の一時間前には確認のためにパソコンを立ち上げ、旭医のサイトにつなげていました。時間になり、発表を見た瞬間「あ、受かってる」と一緒に見ていた母の声が聞こえました。自分でも番号を確認しましたがパソコンの画面を見る、受験票を見るといった動作を何回か繰り返してしまいました。信じられなかったのです。

合格した後の日々は本当に早く過ぎて行きました。高校の先生に合格を伝え、電話をかけながら引越し先を決めたりなどやることはたくさんありました。そして入学式の日、生まれて始めてのスーツを着て、大学へ向かいました。まだ旭川の雪は深く、とても入学式といった雰囲気ではありませんでしたが、「やっとここまで来た…」と「これからやっていけるのだろうか…」という二つの気持ちがあり、とても複雑でした。大学の玄関まで来たとき、たくさんの先輩方に部活に勧誘されました。その勢いに圧倒され、驚くばかりでした。そして入学式を終え、その翌日には新歓合宿。まだ顔と名前が一致する人がほとんどいません。これで大丈夫かとも思いましたが、意外と大丈夫でした。大変面白い二日間を送ることができました。

入学してからはや数ヶ月、前期試験や夏季休暇もすぎ大学ではいろいろなことを学びました。まず試験では油断すると落ちます。何とかなるんじゃないかな、と思っていても無理です。がんばって勉強していても落ちる教科もあります。授業では専門的な言葉がふっと飛び出してきます。自分に合わない教科もあるかもしれません。それでも自分が選んだ道、一日はとても充実しています。

看護職を志す人へ、最初の授業では観察というものの重要さを教えられます。詳しい説明は避けますが患者のことを理解するために、適切な判断力を身につけるために、一人前の看護師であるためには必須です。私も観察能力の不足を感じています。四年間の中でどれほど成長できるかはわかりませんが、卒業時には自分は看護師だと誇りを持って言えるようになりたいと思います。

◎外国人留学生在籍者一覧

平成17年4月1日現在

氏 FamilyName 名 GiverNames	性別	国籍	学年	期間	所属
WANG, GUOLI(王　国丽) ワン　グォリ(通称 ワン)	女	中国	大学院 第4学年	2002.4.1～ 2006.3.31	細胞器官系
AMUTI, WULAMU(馬木提　吾拉木) マムティ　ウラム(通称 ウラム)	男	中国	大学院 第4学年	2002.4.1～ 2006.3.31	生体防御機構系
XIAO, NING(肖　寧) シャオ　ニン(通称 シャオ)	男	中国	大学院 第4学年	2002.4.1～ 2006.3.31	生体防御機構系
SATO, MARCELLO OTAKE サトウ,マルセロ オオタケ(通称 マルセロ)	男	ブラジル	大学院 第3学年	2002.4.1～ 2006.3.31	生体防御機構系
JANG, SEONG JAE(張　成宰) チャン　ソンチェ(通称 チャン)	男	韓国	大学院 第3学年	2004.4.1～ 2007.3.31	生体防御機構系
LIU, XIAO YU(刘　暁宇) リュウ　ショウユ(通称 リュウ)	女	中国	大学院 第1学年	2005.4.1～ 2009.3.31	細胞器官系
ZOU, YI JIE(鄒　奕洁) ショウ　イージェ(通称 ショウ)	女	中国	大学院 研究生	2004.10.1～ 2006.3.31	(産婦人科学講座)

平成17年度　大学院入学者名簿

博士課程

氏名	専攻	研究指導教員
黒田　光	生体情報調節系	菊池　健次郎
磯江　つばさ	生体情報調節系	羽田　勝計
堀部　雅子	生体情報調節系	羽田　勝計
山北　圭介	生体情報調節系	羽田　勝計
細木　卓明	細胞・器官系	高後　裕
田中　雅仁	生体情報調節系	松野　丈夫
十川　健司	生体情報調節系	吉田　晃敏
刘　暁宇	細胞・器官系	鈴木　裕
遠藤　整	人間生態系	吉田　貴彦
上林　宏次	人間生態系	吉田　貴彦

修士課程

氏名	専攻	研究指導教員
伊藤　良子	小児・家族看護学	岡田　洋子
川筋　奈緒美	小児・家族看護学	岡田　洋子
佐々木　洋子	看護教育学	岡田　洋子
葦野　美奈子	看護教育学	岡田　洋子
千坂　亜希子	地域保健看護学	北村　久美子
中谷　理恵	地域保健看護学	北村　久美子
角谷　里佳	地域保健看護学	北村　久美子
蝦名　智子	母子看護学	松浦　和代
宮川　清誇	健康教育開発学	望月　吉勝

盛大に「医大祭2005」を実施！

6月10日（金）から12日（日）の3日間、本学において第31回旭川医科大学「医大祭2005」が盛大に実施されました。

1日目の前夜祭から、2日目の模擬店、フリーマーケット、堀井学氏の講演等、そして花火で最高潮に。最終日は大崎能伸先生の公開授業、人気お笑い芸人「アンガールズ」のショー、そして最後は後夜祭で楽しく盛り上がった3日間に幕を下ろしました。

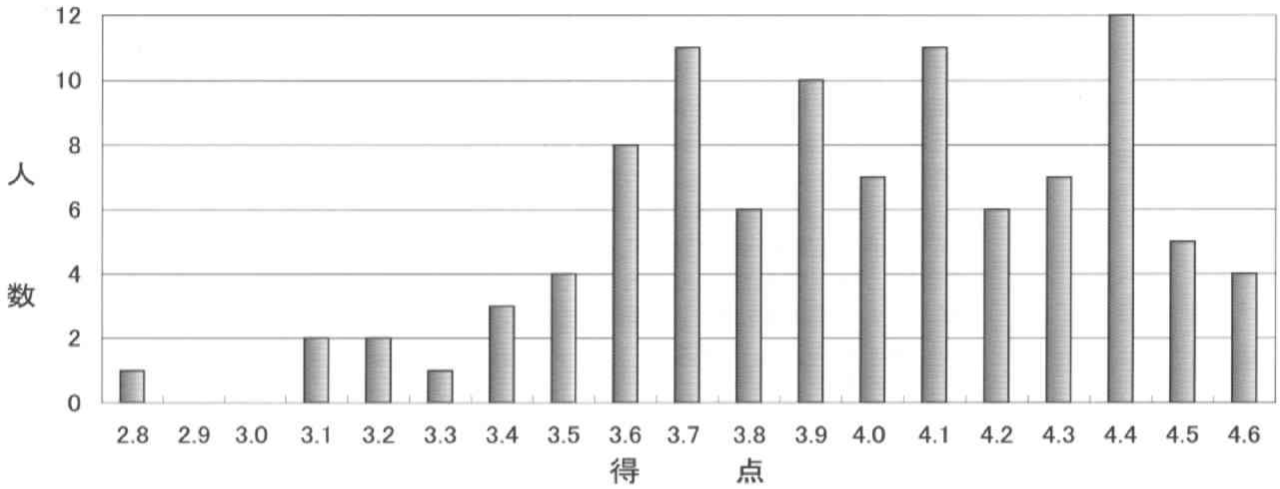
（学生課）

学生による授業評価（平成16年度分）の結果公表について

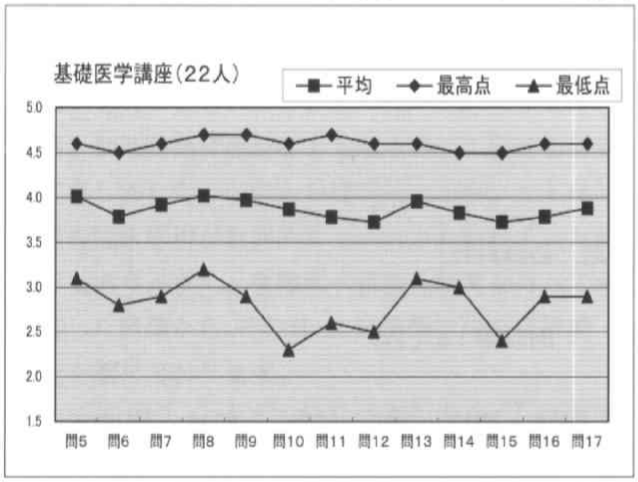
平成16年度後期「講義に対する学生評価」における全教員の得点分布

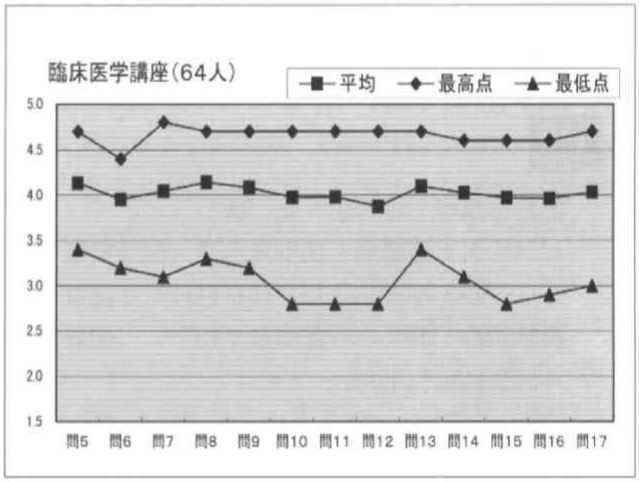
	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6
人数	1	0	0	2	2	1	3	4	8	11	6	10	7	11	6	7	12	5	4

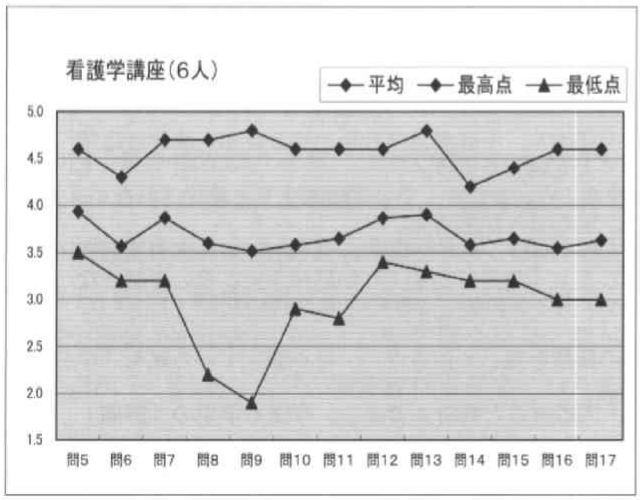
（合計100名　平均値4.0）

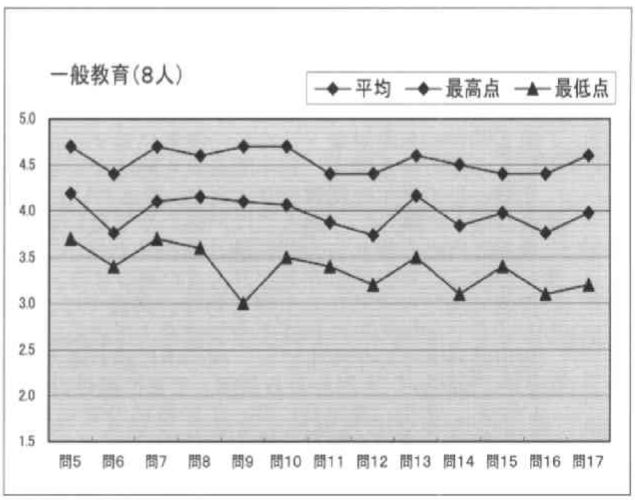


問5～17までの各平均点と最高・最低点









講義に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問2　授業に毎回出席しましたか。 問3　授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問4　授業の復習・宿題を毎回しましたか。
講義計画	問5　各回の講義はよく準備がなされていましたか。 問6　履修要項は授業全体のポイントを理解する上で適切でしたか。
教育意欲・態度	問7　教育に対する情熱・熱意が感じられましたか。 問8　学生に接する態度は授業担当者として適切でしたか。
講義技術・内容	問9　明瞭で聞きとりやすい話し方でしたか。 問10　教材（プリント・スライド・板書など）は適切でしたか。 問11　講義において重要ポイントを強調してくれましたか。 問12　学生の反応を確かめながら講義していましたか。 問13　豊富な知識があり、かつ説明が論理的でしたか。 問14　授業の難易度は適切でしたか。 問15　各回の講義内容は量的に適当でしたか。 問16　今後の学習意欲を増す内容でしたか。
総合評価	問17　この授業は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

1

眼科学講座　吉　田　晃　敏

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修科目）

日　　時：平成16年12月10日(金)　２講目

履修者数：99　　配布数：70　　回収数：61　　回収率：87.1%

＊評価結果（平均）

問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.7	4.4	4.8	4.7	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.6	4.7

＊評価に対するコメント

眼科学講座　**吉　田　晃　敏**

第３学年99名を対象とした私の講義に対する学生からの評価が、一昨年及び昨年の第２位から本年度は第１位との知らせを聞き、19年間教員を務めている者として大変嬉しく思う。

先輩として学生に刺激を与えたり、教えたいことは山程あるが、かと言って全部提供すると消化されない。講義は確かに難しい。過去には戸惑いや気負いがあって、悩む日々があった。

最近、何かが変わった様に感じる。それは、「これまで自分が行ってきた事や、今考えている事を真剣に語りかけることが楽しみとなり、また喜びになってきたこと」、「10のことを７しか話せない、そして話さない自分に満足できること」等である。講義では、100名の学生と共に感じながら、私が言いたい「10」のことの「７」を伝えられればと今では考えている。

旭川医科大学の卒業生には、世の中に誇れるたくさんの業績を残して頂きたい。そう願っている私も「学生から“active”と思われる教師」であり続けたい。

いつも、学生、教室員に言っている私のモットーは、「スピードと共有」である。今後も学生の「評価」に耳を傾け、楽しく教育に尽くしたい。

2

薬理学講座　原　　明　義

科 目 名：基礎医学Ⅱ（医学科第２学年後期／必修科目）

日　　時：平成16年12月９日(木)　１講目

履修者数：101　　配布数：91　　回収数：64　　回収率：70.3%

＊評価結果

問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.6	4.4	4.6	4.7	4.7	4.6	4.7	4.6	4.6	4.5	4.5	4.6	4.6

＊評価に対するコメント

昨年に引き続き、私の講義を高く評価していただき、大変光栄に思っております。また、有益な意見等を寄せてくださった学生に感謝致します。

学生にとって、薬理学は薬物名を含め、覚える事項が非常に多い科目かも知れません。しかし、薬理学は薬物療法の基礎となる学問ですので、その知識を十分に習得し、応用力を身につけ、臨床医学につなげていくことが肝心です。そのためにも、私は理解しやすい講義、興味がもてる講義を目指して、今後も努力を重ねていきたいと思っております。一緒に頑張りましょう！

3

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座　今　田　正　信

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修科目）

日　　時：平成16年12月17日(金)　１講目

履修者数：99　　配布数：80　　回収数：61　　回収率：76.3%

＊評価結果（平均）

問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17
4.5	4.4	4.6	4.7	4.7	4.5	4.6	4.6	4.5	4.6	4.6	4.5	4.6

＊評価に対するコメント

耳鼻咽喉科・頭頸部外科　今　田　正　信

① 講義に使用するプリントの量は適切であるか？
② プリントの内容は伝えたい、覚えてもらいたいことを網羅しているか？
③ そもそもそのプリントの内容を理解しやすい方法で伝えられるほど自分自身が理解、把握しているか？
④ プリントを使用した講義が１つのストーリーとして成立し、飽きることの無いようによどみなく進行するか？

以上のことに留意し講義することを目指しているつもりであるが、やはりまだまだ未熟な点が多々ありその結果の点数であると自覚している。どうせやるのなら心の通った講義を心掛けたい。

以下４．４以上（上位20％内）の教員は次のとおりです。（＊五十音順）

所属名	教員名	科目名		日時	学年	履修者数	配付数	回収数	回収率(%)
皮膚科学講座	飯塚　一	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成16年12月16日(木) 3講目	医3	100	73	57	78.1
麻酔・蘇生学講座	岩崎　寛	麻酔学	必修	平成16年11月2日(火) 4講目	医4	93	88	80	90.9
非常勤講師	江口　尚文	経済学	選択	平成17年2月2日(水) 2講目		21	21	21	100.0
麻酔・蘇生学講座	鈴木　昭広	麻酔学	必修	平成16年12月7日(火) 4講目	医4	93	83	61	73.5
生理学第二講座	高草木　薫	基礎医学Ⅰ	必修	平成17年1月26日(水) 2講目	医2	101	66	52	78.8
心理学	高橋　雅治	生命科学Ⅴ	必修	平成16年11月4日(木) 3講目	医1	90	75	75	100.0
周産母子センター	田熊　直之	生命科学Ⅵ	必修	平成16年10月22日(金) 5講目	医1	90	82	80	97.0
内科学第一講座	中野　均	内科学	必修	平成16年12月15日(水) 3講目	医4	93	86	59	68.6
耳鼻咽喉科学講座	野中　聡	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成16年12月15日(水) 3講目	医3	99	88	57	64.8
内科学第二講座	羽田　勝計	内科学	必修	平成17年1月19日(水) 5講目	医4	93	88	68	77.3
耳鼻咽喉科学講座	林　達哉	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成16年12月3日(金) 2講目	医3	99	93	63	67.7
病院手術部	平田　哲	外科学	必修	平成17年1月12日(水) 1講目	医4	93	74	50	67.6
看護学科	藤井　智子	在宅看護学	必修	平成17年2月8日(火) 3講目	看2	71	71	71	100.0
看護学科	松浦　和代	発達障害看護学	必修	平成16年12月10日(金) 5講目	看3	69	57	57	100.0
眼科学講座	森　文彦	臓器別・系別講義Ⅵ	必修	平成17年1月6日(木) 4講目	医3	99	95	46	48.4
病理学第一講座	吉江　真澄	基礎医学Ⅰ	必修	平成16年12月15日(水) 1講目	医2	101	44	31	70.5
解剖学第一講座	吉田　成孝	基礎医学Ⅰ	必修	平成16年11月10日(水) 4講目	医2	101	77	63	81.8
小児科学講座	吉田　真	小児医学	必修	平成17年1月24日(月) 1講目	医4	93	83	56	67.5

科目全体の講義企画に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に履修要項や教科書を読むなど予習をしましたか。 問2　授業に毎回出席しましたか。 問3　授業中に授業内容を理解するための努力をしましたか。 問4　授業の復習・宿題を毎回しましたか。
科目構成	問5　科目全体の履修目的は、履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。 問6　履修主題間および教員間で、内容の過度な重複は避けられていましたか。 問7　各履修主題に割り当てられた時間のバランスは適切でしたか。 問8　各担当教員は履修主題に沿って授業を行いましたか。
科目内容	問9　各履修主題の難易度は適切でしたか。 問10　科目全体の内容は理解しやすいものでしたか。 問11　科目全体の履修の目的は最終的に達成されましたか。 問12　科目全体の内容は今後の学習意欲を増すものでしたか。 問13　試験や提出物（レポートなど）の量と内容は適切でしたか。
総合評価	問14　この授業は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 名：社会医学基礎Ⅱ（医学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：88　　配布数：87　　回収数：79　　回収率：90.8%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.4	4.3	3.5	2.7	3.2	3.4	3.3	3.3	3.5	3.3	3.2	3.0	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.2				

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅱコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この授業は「患者の権利」について学習する授業となっています。全15回のうち半分を非常勤の須長一幸先生（哲学・倫理学専門）が、残りを社会学の松岡が行っています。須長先生に対する学生の評価は非常に良く、松岡に対しては厳しい意見が並んでいました。例えば「到達目標が明確でない」など。確かに、到達目標を明確にするという発想が私の中になく、あるのは、「考えるきっかけを与えるので、後は自分で考えて下さい」という姿勢です。これは自分が教育を受けた約30年前の社会科学のスタンスで、今となっては時代遅れの考え方なのでしょう。「後は自分で考えて。」という授業のやり方では、学生は途中で放っぽり出されたような、中途半端に終わってしまった印象を受けるのでしょう。やはり、最後の「答え」まで行きつくことが要求されるのだと思いました。

科 目 名：生命科学Ⅳ（医学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：88　　配布数：87　　回収数：87　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	4.0	3.7	3.0	4.0	4.1	3.9	4.2	3.5	3.2	3.7	3.5	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅳコーディネーター　**中　村　正　雄**

昨年と比べ、今年度は全般的に評価が改善され一安心している。今年度、低い評価を受けた問１、問４は講義の予習と復習についてで、自由記載に寄せられた“講義内容が難しい”との意見を考え合わせると、講義で理解できなかった箇所をそのままにしている日常生活がうかがえる。

生命科学Ⅵとの重複は、ヘモグロビン分子についての講義箇所と思える。生命科学Ⅳでは、タンパク分子の構造と機能に焦点を絞り、遺伝子レベルの扱いを削ることで重複をなくすことができると思える。

科 目 名：生命科学Ⅴ（医学科第１学年後期／必修）
履修者数：88　　配布数：87　　回収数：86　　回収率：98.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.8	4.3	3.9	2.9	4.1	4.4	4.1	4.4	4.4	4.4	4.3	4.1	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅴコーディネーター　**高　橋　雅　治**

講義全体に対する満足度は4.3であり、全体的に高い評価を得ていると思われる。また、科目構成に関連する評価（目的の明示、重複、バランス、主題）についても、すべて4.1以上であり、構成について大きな問題はないと思われる。さらに、科目内容についての評価（難易度、理解しやすさ、目的、意欲、試験とレポート）も4.0以上であり、ある程度高い評価を受けていると思われる。今後は、臨床の教員と有機的に連携し、より有用な科目の構築を目標としたい。

科 目 名：生命科学Ⅵ（医学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：88　　配布数：87　　回収数：86　　回収率：98.9%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	4.3	4.2	3.2	4.0	3.2	3.5	3.9	3.7	3.8	3.9	4.3	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅵコーディネーター　**林　　要喜知**

本科目は８人の教員によるオムニバス方式であるため重複する内容が目立ち、各教員の連携がスムーズでなかったと評する学生が少なからずいた。また、内容も多岐にわたり解りにくかったというネガティブ面の是正を求めるコメントがある反面、内容や教え方にとても興味と刺激を受けたとか、とても分かりやすく、旭医で一番学生のことを考えた最高の授業であったと評価する学生も多かった。この相反するコメントはおそらく、どちらも学生の本音であろうが、本講義内容を負担に感じるかそうでないかにより、評価が別れる微妙な側面を持っていると思われる。物理的理由から要望の全てに応えられないが、改善できる点はしっかりと対応していきたいと考えている。評価項目の平均点は3.81であったが、今後、開講時期の変更などを含めて、様々な角度から本科目の改善にむかって努力したいと考えている。

科 目 名：生命科学Ⅶ（医学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：88　　配布数：87　　回収数：84　　回収率：96.6％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.2	3.7	3.8	3.1	4.3	4.0	3.6	4.2	3.6	3.8	4.0	4.0	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.8				

＊評価に対するコメント

生命科学Ⅶコーディネーター　**渡　部　　剛**

現行のカリキュラムになってから本科目の評価は、平均3.5以上のポイントを得ており、科目の企画・展開方法に関しては、ほぼ確立されたと思われる。さらに評価点を向上させるためには、このコースを担当する各教員が精進して、個々の講義の質を高めていく必要があるだろう。限られた講義の時間では残念ながら説明不足の点もあったかと思われるが、今後も組織学・病理学の領域で質問・疑問が生じた場合には、気軽に担当教員まで尋ねに来て欲しい。

科 目 名：社会医学基礎Ⅳ（医学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：101　　配布数：78　　回収数：54　　回収率：69.2％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.6	4.2	3.5	2.8	3.3	3.4	3.3	3.4	3.4	3.3	3.1	3.0	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.2				

＊評価に対するコメント

社会医学基礎Ⅳコーディネーター　**松　岡　悦　子**

この授業は「患者－医師関係」について学ぶ授業となっており、15コマのうち半分を非常勤の須長一幸先生（哲学・倫理学専門）が、残りを松岡（社会学）が受け持っています。須長先生の授業は、生命倫理の事例を出し、それに対する学生のコメントを集め、そのいくつかを選んで、スキャナーでとりこんでパワーポイントにし、それを参照しながら倫理的思考を解説するというやり方で、学生の評価は非常に高いものでした。それに対して、松岡の内容は、医師の専門職化の過程から、医療に倫理が必要とされるようになったプロセスをたどるというものでしたが、学生からの評価は非常に低いものでした。松岡の授業目標が、「外部の視点をもって医学・医療を見ることができるようになること」だったのですが、それを行うには、もっとわかりやすい授業にする必要があると思いました。

科 目 名：基礎医学Ⅰ（医学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：103　　配布数：102　　回収数：100　　回収率：98.0%

＊評価結果(平均)

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.5	3.8	4.0	3.4	4.3	3.9	3.7	4.1	3.9	4.0	3.9	4.0	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅰコーディネーター　**吉　田　成　孝**

本統合科目は昨年度手探り状態で始め、臓器別統合や頻回試験などの新たな試みを行った。その反省も踏まえ本年度は昨年度のものをマイナーチェンジする形で行った。その成果もあり全体としてより良くなっているものと自負している。昨年度と評価項目が若干異なっているので、直接的な比較は出来ないが、昨年度の評価でやや評点が低かった内容の重複やバランスは明らかによい評価を受けているといってよいだろう。試験の量と内容についても昨年の3.6から4.0と上昇しているので、頻回試験に対する理解も進んだものと考える。ひとつ気になるのは予習と復習および授業への出席に関する自己評価が明らかに昨年の学生より落ちていることである。これが、本コースの問題に起因するものなのか、当該学年特有の問題なのか注意してみていきたい。

科 目 名：基礎医学Ⅱ（医学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：104　　配布数：99　　回収数：99　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.0	3.8	3.8	3.0	3.8	3.8	3.5	3.8	3.5	3.5	3.6	3.7	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

基礎医学Ⅱコーディネーター　**若　宮　伸　隆**

薬理学、寄生虫学、微生物学の３領域の系統講義を１つの科目として統合する形になって２年目であり、昨年と同様に３領域の講義を並行して展開する方式は、多くの学生諸君に受け入れられたと思います。

本科目は、コアカリキュラムで「個体の反応」としてまとめられていることに由来する構造的な捻れを内包しており、授業方法だけではなく、授業時期（第２学年後期）、成績評価基準等についても検討されるべき点があり、また、これに関連して、本科目を構成する３領域の実習展開時期が、講義の時期と切り離されていることにも問題があるように思われます。担当３講座の教員が連携して、今後これらの課題を検討して行きたいと考えています。

今回の授業評価では、このアンケート調査が期末試験当日に実施されるのは好ましくないとのコメントが複数見られました。アンケート自体に「試験内容等」を問う項目があるため、致し方ないのも事実ですが、何らかの工夫が必要であると思われます。

科 目 名：基礎医学特論（医学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：101　　配布数：67　　回収数：53　　回収率：79.1%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.0	4.0	3.4	3.0	3.8	4.0	3.7	3.9	3.3	3.3	3.3	3.5	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.4				

＊評価に対するコメント

基礎医学特論コーディネーター　**谷　口　隆　信**

ご意見／ご指摘は以下の３点に集約されました。
１．難解である　　13票
２．有意義だ　　12票
３．講師の常識の欠如　11票

１については、講義の展開方法が拙劣で聞くものの立場に立っていないというもので、相手の立場に立つことの重要性に気づいてくれたということは、履修者が病める人の立場を慮るべき医師を志す人たちであることを考えると、私個人としては大変心強く存じます。講師の先生方には「予算獲得のかかった、無知な審査員を前にしたプレゼン」を例に挙げてお願いを致しました。

２については、週末の貴重な時間の中私どもの講義に価値を見出して頂いていることが分かり安堵しています。

３については二件（３名）、医学の中での講義であるとの認識が不足していた某先生と、講義の日時を失念しておられた某講座の先生方です。前者の講師に対しては直接お話をし今後このようなことが無きよう御理解を頂きました。

頂いたご意見／ご提言をもとに、次の４項目を掲げて参ります。
１．門外漢の理解を得られるプレゼンを心掛ける。
　１）履修済・履修中の講義との関連性を明確にする。
　２）履修者の到達度（第２学年後期）を考慮して適宜解説する。
２．テーマに関する問題提起や今後の課題についても触れる。（レポートのヒントを示す）
３．参考文献を必ず印刷物として配布する。
４．各講座に対して講義スケジュールを配布する。

科 目 名：臨床医学概論Ⅱ（医学科第３学年後期）
履修者数：99　　配布数：97　　回収数：95　　回収率：97.9%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.8	4.2	3.7	3.0	4.0	3.6	3.8	3.9	3.8	3.8	3.8	3.4	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

臨床医学概論Ⅱコーディネーター　**近　藤　　均**

塩野（副学長・法医学）３コマ、吉田ほか（健康科学）６コマ、松岡（社会学）２コマ、近藤（歴史・哲学）４コマで実施した。モデル・コアの「Ａ．基本事項」の発展的な部分を扱うほか、「Ｆ．医学・医療と社会」の基礎的な部分を扱って第４学年の「社会医学」につなげるというねらいもある。評価結果はあまり良くなかった。自由記載欄の意見を参考にしてその理由を探ると、①「臨床医学概論Ⅰ」「臨床医学序論」「医療情報学」とダブっている内容が少なくなかった。②必修科目にふさわしくない（CBTや国家試験には出題されそうもない）マニアックな講義があった。③教員によって難度にばらつきがあった。④試験が難しかった（とくに択一問題が紛らわしかった）。このうち①④については、平成17年度は大幅に改善されるはずである。②③については、教員間の意識の差が埋め難い溝として残っている。各教員には独自のフィロソフィーあるいはポリシーがあり、コーディネーターといえども踏み込めない聖域となっている。とはいえ改善に極力努めたい。さらに、１年生の「社会医学基礎Ⅰ」から４年生の「臨床医学概論Ⅳ」まで、広義の倫理関係の座学授業が120コマもあるのは多過ぎるのではないかという批判も根強い。この点は、次のカリキュラム改革の際には重要な検討課題となろう。

科 目 名：選択必修コースⅠ（臨床感染症学コース）（医学科第３学年後期／選択必修科目）
履修者数：24　　配布数：24　　回収数：24　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.1	4.0	3.2	4.3	4.2	4.2	4.3	4.2	4.1	4.1	4.4	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.3				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ（臨床感染症学コース）コーディネーター　**若　宮　伸　隆**

授業評価結果は、受講学生諸君の自己評価欄を除いて全て平均４を超えており、学生諸君の期待に応えられる内容であったと総括できる。本コースは新新カリの授業として初めて開講したものであり、基礎部局と臨床部局が分担するのみならず、本学附属病院院内感染対策委員会やインフェクションコントロールチームにも応援を仰ぎ、また、国立感染症研究所、旭川保健所等、学外の関連領域専門家による講義も組み込んで編成された「感染症学導入授業」として位置付けられる。

授業に対するコメントでも、「興味深かった」とするポジティブな意見が７割を占めた一方、開講時期が年明けの１月中旬から後期試験週直前の２月中旬であり、落ち着いて受講するには不向きな時期であるといった意見等、今後の本コースを組み立てる上で参考にすべき意見が10件程寄せられたので、これを次年度に活かして行きたいと思います。

科 目 名：選択必修コースⅠ（ニューロサイエンスコース）（医学科第３学年後期／選択必修科目）
履修者数：64　　配布数：56　　回収数：28　　回収率：50.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.9	4.7	3.2	2.5	4.0	3.8	3.6	4.0	3.8	3.5	3.1	3.6	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.6				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅠ（ニューロサイエンスコース）コーディネーター　**吉　田　成　孝**

神経系は複雑でありかつ未知な点が多いために理解するのが難しい、しかしその不思議さから、医学的にも他の分野からも大きな興味がもたれている。本コースは通常の授業では触れる事が困難な神経系の面白さ、これからの問題点などを多角的な観点から出来るだけ理解して欲しいという事で企画された。このために出席重視で試験を行わないこととしたため、出席状況は良好であったが、必ずしも講義に集中していないという状況が生じた。評価が行われた授業の出席率は高かったにもかかわらず、評価の回収率が50％であったことも物足りなさを感じる。評価項目で3.5以下の項目は予習、復習、理解のしやすさと目的の達成度であった。理解のしやすさに関しては各講師の今後の努力に期待したい。目的の達成度に関しては評価法や開講時期も含め総合的に検討して努力していきたい。

科 目 名：選択必修コースⅡ（臨床腫瘍学コース）（医学科第３学年後期／選択必修）
履修者数：24　　配布数：24　　回収数：21　　回収率：87.5％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.0	4.0	4.1	3.3	3.9	4.1	4.2	4.3	4.2	4.0	4.2	4.3	4.5

問14	問15	問16	問17	問18
4.4				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ（臨床腫瘍学コース）コーディネーター　**髙　後　　裕**

臨床腫瘍学コースは、癌に関する基礎的・臨床的話題から臨床試験、緩和医療に至るまで幅広い領域を診療科の枠を超えて学習するコースである。24名の学生が選択したが、自ら興味を持って受講しているためか、大変熱心に講義に参加していた。学生の総合評価も4.4と高得点であった。講義を担当された先生方も、自分の専門とする分野を学生向けにわかりやすく講義してくださり、学生の興味を満足させられる内容であったものと思われる。試験に関する問13が4.5と高得点で好評であったが、本コースでは、講義の内容から数問の問題とその解答・解説の作成を担当教員にお願いし、これらをあらかじめ学生に公開し、その中から試験するという方法をとった。試験結果も大変よく、今後もプール問題を増やしながらこの方法を継続していきたいと考えている。

科 目 名：選択必修コースⅡ（メンタルヘルスコース）（医学科第３学年後期／選択必修科目）
履修者数：64　　配布数：61　　回収数：59　　回収率：96.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.2	4.4	3.7	3.2	3.7	3.7	3.8	4.0	3.9	4.0	3.8	3.8	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅡ（メンタルヘルスコース）コーディネーター　**千　葉　　茂**

メンタルヘルスとは、精神障害の発症予防、早期発見、早期治療、リハビリテーションのみならず、精神的健康の増強をも含めた広い概念である。本コースは、現代社会におけるメンタルヘルスを学ぶことを目的に開講された。

本コースには、64名の学生が受講を希望してきた。授業は、心理学、社会学、生理学第２、内科学第１、内科学第２、総合診療部、精神医学の教員で構成され、多角的な授業が展開された。出席状況は良好で、授業評価も、試験の成績も比較的良好であった。学生からは、とても興味深い内容であったとの高い評価が寄せられた一方、開講時期を検討してほしい（余裕のある前期にしてほしい）との希望や、系統講義と平行して行われることへの不満も散見され、開講時期については再考に価すると思われる。本学学生が自主的にコースを選んで勉強するという新しい試みが成功するためには、学生との対話が必要であると実感した。

科 目 名：選択必修コースⅢ（臨床遺伝学コース）（医学科第３学年後期／選択必修）
履修者数：21　　配布数：21　　回収数：21　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
2.9	4.0	4.1	3.1	4.0	4.0	4.2	4.2	4.0	3.9	4.2	4.5	4.2

問14	問15	問16	問17	問18
4.4				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ（臨床遺伝学コース）コーディネーター　**谷 口 隆 信**

分子遺伝学研究の飛躍的な発展に伴い、さまざまな疾病や病態に遺伝遺伝子情報が広範囲に関与することが明らかになってきました。従来、経験的確率論の域を出なかった臨床遺伝学に、遺伝子検査による確定診断と発症前出生前診断という客観性が付与されてきたと言えます。2002年からは臨床遺伝専門医制度が発足し、遺伝性疾患の患者家族のみならず国民のニーズに応じた臨床遺伝医療と情報を提供する専門家の養成も始まっています。このような状況をふまえ、このコースの趣旨は、講義とロールプレイを交えたカウンセリング体験を通じて、臨床遺伝学の初歩的ではあるが最も基本的な部分を学んで頂くというものでした。蓋を開けてみると受講者が21人と少なくちょっと不安でしたが、講義がゼミ形式に近くなり講義時間内に問題を解決できる余裕が生じる効果もありました。また、擬似カウンセリングのところでは、少人数でしか出来ない小回りの良さが発揮でき、良い体験になったものと思います。

科 目 名：選択必修コースⅢ（感覚器医学の最先端コース）（医学科第３学年後期／選択必修）
履修者数：73　　配布数：54　　回収数：39　　回収率：72.2%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.7	3.9	3.2	4.1	4.1	4.0	4.3	4.3	4.3	4.1	4.2	4.6

問14	問15	問16	問17	問18
4.2				

＊評価に対するコメント

選択必修コースⅢ（感覚器医学の最先端コース）コーディネーター　**吉 田 晃 敏**

このコースでは、感覚器の時代とも言われている21世紀にあって、「視覚」、「味覚」、「嗅覚」、「平衡感覚」、「聴覚」、「触覚」など、医師として必要な感覚器の基礎・臨床、そして最先端と盛りだくさんな内容を扱った。

レポート提出による学生の成績は良かった。しかし、系統講義で数多くの臨床科目を行った後、この時期の開講に少なからず無理があったかもしれない。「折角興味深い内容なのに試験の直前で…。」という学生の声が多かった。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅱ（医学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：99　　配布数：99　　回収数：90　　回収率：90.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.2	4.1	3.5	4.0	4.0	3.6	4.1	3.6	3.6	3.7	3.9	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.7				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅱコーディネーター　**羽　田　勝　計**

臓器別・系別講義Ⅱは３年生後期に内分泌代謝系疾患と腎泌尿器系疾患を中心に第一内科・第二内科・泌尿器科・小児科・耳鼻咽喉科による講義で構成されている。全コマ数は60コマで、他の臓器別・系別講義と比較して決して多くない講義量であったが、意外にも学生からの評価は「内容が膨大すぎる」、「試験範囲が広すぎて試験勉強の意欲が萎える」などマイナスの評価が散見された。なかには「内分泌代謝系疾患と腎泌尿器系疾患は別々の枠組みの方が理解しやすい」などの意見もあった。その一方で、科目構成評価はほぼ４点台と一定の理解は得られていると考える。科目内容評価については、試験の量と内容が3.4とやや厳しい評価であったが、概ね3.6～3.9とほぼ妥当な内容であったと思われる。また、他の臓器別・系別講義でも指摘されているように講義のスケジュールが短期に集中していることや一つの臓器別・系別講義全体のコマ数が多いことに対する不満もあり、臓器別・系別講義の再構成化も含めた授業全体の再構築化も今後の課題として残された。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅲ（医学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：99　　配布数：98　　回収数：90　　回収率：91.8％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.3	4.2	3.6	4.0	4.0	3.8	4.1	4.0	3.9	4.0	4.0	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
4.0				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅲコーディネーター　**髙　後　　裕**

臓器別・系別講義Ⅲは、膠原病、感染症、血液・腫瘍学に関する講義である。学生の総合評価は4.0とほぼ満足できる評価であった。学生の自由意見を見ると、内容の割には時間数が足りないとの意見も多かったが、従来のカリキュラムでは小児科、内科などで重複していた講義内容が整理され、効率的に短期間で集中して行うカリキュラムとなっており、その分時間数の割には内容が濃くなっていたのかもしれない。学生の自己評価として講義の予習・復習の点がそれぞれ3.5、3.6と低いのが気にかかるが、短期・集中型カリキュラムの効果をあげるためにも、学生のがんばりに期待したい。試験が難しかったとの意見も見られたが、本試験の中央値は70点弱で試験全体のレベルとしては適当と思われる。また、再試験を受けた学生もよく勉強してくれ、全員60点以上の合格点であった。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅴ（医学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：99　　配布数：97　　回収数：83　　回収率：85.6％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.2	4.1	3.5	3.9	3.7	3.8	4.0	3.9	3.8	3.9	3.9	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
3.9				

＊評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅴコーディネーター　**千　葉　　茂**

本講は、脳、脊髄、および末梢神経系の解剖と機能を念頭に置きながら、精神神経学にかかわる広範な医学・医療を学ぶことを目的とする。授業は、内科学第１、小児科学、脳神経外科学、放射線医学の教員で構成された。学生からは、全般的に、興味ある授業が展開されたと評価されている。以前は他の講座の教員も入っていたため、学生の授業評価の中には「コースとしての統一性がない」という指摘もあったが、今回の評価ではこうした意見はまれであった。ただし、今後も体系だった講義を行う努力を継続すべきである。驚いたことに、授業の仕方について、複数の教員が学生に顔を向けずに（背を向けたままで）授業するのはいかがなものか、という評価があった。教員全体が、この評価に真摯に耳を傾けるべきであると思われた。一方、試験問題は試験終了後に公開してほしいとの意見があったが、さまざまな観点から慎重に議論されるべきであろう。

科 目 名：臓器別・系別講義Ⅵ（医学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：99　　配布数：99　　回収数：85　　回収率：85.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.3	4.2	3.5	4.2	4.1	4.0	4.2	4.0	4.1	4.0	4.2	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
4.1				

評価に対するコメント

臓器別・系別講義Ⅵコーディネーター　**飯　塚　　一**

臓器別・系別講義Ⅵは、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科頭頸部外科、歯科口腔外科の４科、105コマからなる混合講義である。臓器別というには、個々の科目はさらに細分化されており、実際の運用にあたって、統一的、系統的な枠組みからは相当はずれている。その結果、学生はどちらかといえば相互関連の乏しい膨大な分量の知識を与えられることになり、試験も１コマで行うには範囲が広く、学生にとっては厳しすぎるという意見が多かった。問13の評価が低かったのはそのせいと思われる。実際、試験時間も延長せざるを得なかったなど予期せぬ対応もせまられており、次年度は、試験については配慮が必要かもしれない。なお講義自体は興味深かったという意見が数多くみられ、コーディネーターとしてはほっとしている。各講座の熱意ある教員に感謝したい。評価の総合点4.1は、まあまあ合格点というところかなと思っている。

科 目 名：人間科学Ⅱ（看護学科第１学年通年・必修科目）
履修者数：70　　配布数：61　　回収数：61　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
1.8	4.1	3.3	2.1	3.4	3.7	4.0	3.9	3.8	3.8	3.5	3.5	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.7				

＊評価に対するコメント

人間科学Ⅱコーディネーター　**近　藤　　均**

社会学の専任15コマ、歴史・哲学の専任15コマ、哲学・倫理学の非常勤15コマで通年３単位の授業を展開した。評価は例年とほぼ同じで、あまり良くなかった。必修科目ではあるが、医学科とは違って全国共通のコア・カリに該当するものがないので、内容は担当教員の裁量に任されている。教員間の意思の疎通が希薄で要求水準も異なっていたため、科目としての統一的なコンセプトを学生に伝えられないままになってしまった。学生参加型ではなく講義一辺倒のコマが多かったことも低い評価につながったようである。とはいえ、そもそも高校の「地歴・公民」（現代社会・倫理・政治経済・日本史・世界史・地理）の時間に何を学んできたか、センター試験でどの科目を選択したかが学生ごとにまちまちなので、授業計画をたてにくいという問題も根深いものとしてある。とりあえず平成17年度は、ほかの非常勤講師にも御支援をお願いし、内容も、もっと看護の勉強と密着するようなものをふんだんに盛り込みたい。

科 目 名：健康教育論（看護学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：70　　配布数：70　　回収数：70　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.9	4.1	3.6	2.9	3.9	3.8	3.7	4.1	4.0	3.9	4.0	3.8	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.9				

＊評価に対するコメント

健康教育論コーディネーター　**望　月　吉　勝**

参加型授業を意図して、ピア・レクチャーの活用、一般住民を対象と想定しての健康教育教材づくりのグループワーク、さらに教育学専攻の学外講師により、小・中・高校生を相手に健康教育を行うという場面設定でのゲームやクイズを体験することなどを取り入れてきました。今年度は、ピア・レクチャーの効果を上げるため、説明グループと質問グループを割り振り、事前学習のうえ、授業時に発表してもらうことを繰り返し行いました。教材づくり演習でも、中間発表会で、教材として優れている点や、改善を要する点を指摘しあい、改良のうえ、最終発表会を行いました。こうして繰り返し演じたことにより、知っているだけでなく、相手に伝えて理解してもらうためのスキル習得を目指しました。他の科目での発表にも役立ったとの自習記載があり、その成果の現れと思われます。

科 目 名：疾病論（看護学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：61　　配布数：61　　回収数：61　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.5	4.2	4.0	2.8	3.4	3.3	2.9	3.5	3.1	3.2	3.2	3.6	3.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.4				

＊評価に対するコメント

疾病論コーディネーター　**岩　元　　純**

疾病論は、看護学科２年生の通年の科目である。調査用紙の回収は61と100％の回収率であった。全体としての満足度は、3.4で例年通り。試験や提出物が適当だったという問いへの評価が3.0で「普通」だったが、今後の学習意欲を増したかという問いへの評価は、3.6と高かったので、担当の先生方の授業がおしなべて高い水準にあったことの結果だと思われる。数十人が授業を行うこの科目では、事前の予習はほとんど不可能なので、学生が2.5という自己評価をつけたのはいたし方がないとしても、復習の自己評価についても2.8とあまり高くなかったのは残念であった。この点に関しては、学生側にも一層の努力を期待したい。また、唯一3.0を切った評価（2.9）が、授業時間のバランスについてであった。すこしずつ改善されたとはいえ、一部に重複する内容もあるので、今後この点も考慮して時間割の変更を行うよう努力したい。

実習企画（または演習企画）に対する学生評価

あなた自身について	問１　事前に配布された資料を読むなど予習をしましたか。 問２　実習（演習）に毎回出席しましたか。 問３　実習（演習）に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習（演習）計画	問４　実習（演習）の目的は履修要項やガイダンスで明確に示されましたか。 問５　実習（演習）はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。 問６　学生数に対して指導担当者数は適切でしたか。 問７　指導担当者は適切な指導能力を備えていましたか。 問８　指導担当者間の連携は適切でしたか。
実習（演習）内容	問９　実習（演習）の内容は、関連する講義科目の内容と対応がとれていましたか。 問10　事前に配布された資料は、実習（演習）を進める上で役立ちましたか。 問11　実習（演習）によって技術を十分に習得することができましたか。 問12　実習（演習）内容の難易度は適切でしたか。 問13　課された提出物（レポートなど）の量や内容は適切でしたか。 問14　実習（演習）は今後の学習への意欲を増す内容でしたか。
実習（演習）環境	問15　実習（演習）用の設備・機材・用具などは性能と量の面で十分でしたか。 問16　安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問17　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問18　この実習（演習）は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 名：生命科学実習Ⅱ（医学科第１学年Ｂ組後期／必修科目）
履修者数：44　　配布数：44　　回収数：44　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.9	4.5	3.9	4.6	4.2	4.0	3.7	3.7	4.0	3.6	3.8	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.9	3.9	3.7	3.7

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅱコーディネーター　**谷 本 光 穂**

この評価結果は、授業評価委員会と学生課教務係の不手際によりＢ組のみの評価結果となってしまった。従って、受講生全体の意思は反映されていないが、授業企画はクラスによる違いはないので、概ね全体の意向を反映しているものと解釈してもよい。

さて、評価の単純平均値は3.88であり、概ね良い評価を受けたといってよい。ただし、問14（実習は今後の学習への意欲を増す内容でしたか）の評価が3.2となっていて決して良いとはいえない。より発展的な内容を企画する必要がありそうに思われる。また、問13では、レポート提出に対する負担が大きいとの評価が示された。高校でレポートにまとめるという作業の経験が全くない者が、大学の実習で初めてレポートを書かされるのだからこの気持ちは理解できる。しかし、少々無理をしても早く慣れてもらわねばならない。

科 目 名：生命科学実習Ⅲ（医学科第１学年Ａ組後期／必修科目）
履修者数：44　　配布数：43　　回収数：43　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
3.3	4.8	4.5	3.5	4.2	2.8	2.9	2.9	3.7	3.9	3.7	3.6	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.2	3.7	3.6	3.0	3.3

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅲコーディネーター　**高 橋 龍 尚**

今年度は、昨年の授業評価の結果をふまえ自宅学習や予習など積極的な自学自習姿勢を促す工夫に取り組みました。その結果、学習姿勢の積極性が向上し改善が認められました。しかし、予習については昨年に比べ改善されていますが、予習を十分に促すほどには至っていないと思われます。

次に、実習計画欄は評価点の低さが目立ちます。現在45人クラスの実習を２人の教員で行っています。学生としては、できれば様々な質問や直接指導を望んでいると思いますが、２人の教員ではどうしても十分な時間を割くことができませんでした。これらの問題については、今後の改善課題として最優的に取り組みたいと思います。

科 目 名：生命科学実習Ⅳ（医学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：89　　配布数：82　　回収数：69　　回収率：84.1%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.4	4.7	4.2	4.4	4.3	3.6	4.1	4.0	4.3	4.1	3.8	3.4	3.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	3.8	4.1	3.8	3.8

＊評価に対するコメント

生命科学実習Ⅳコーディネーター　**渡　部　　剛**

本実習に関しては、2002年度から新しいカリキュラムの実習時間数に合わせて提出課題を厳選し直し、学習目標・到達目標や観察すべき構造を実習プリントに明記するようにした。授業評価の結果は、年度によって多少の変動はあるものの平均４点弱と安定してきた。ただ昨年度あたりから提出課題を減らしてほしいという意見が学生から多く寄せられるようになってきたので、来年度から思い切って提出課題を３分の１に減らし、その分、実習期間中に行うスライドテストの配点を高くする予定である。

科 目 名：基礎医学実習Ⅰ（医学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：101　　配布数：96　　回収数：96　　回収率100.0%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.3	4.8	4.5	4.6	4.6	3.7	4.5	4.2	4.4	4.6	4.2	4.2	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.5	4.4	4.4	4.4	4.5

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅰコーディネーター　**吉　田　成　孝**

今年度の２年生は新々カリキュラム２年目で基礎医学実習Ⅰも昨年の反省点をふまえてマイナーチェンジを行った。系統解剖では全ての時間に実習終了時の口頭試問を行った事、放射線画像読影実習にコンピュータを使用した事などである。これもあって、事前の予習と実習への取組みが0.4点ずつ上昇した。これは学生自身の積極的な取組みを引き出せた結果であると解釈して非常に喜ばしく思っている。今年度は系統解剖において学生の手がどうしても足りない部分を教員が張り付いて補った事があった。これにより、教員の数が少ないとの不満が少なからずあったが、このような場合の対処法に関しては次年度以降の課題としたい。学生自身の動機付けと実習全体の目標達成に向けて、さらに工夫していきたい。

科 目 名：基礎医学実習Ⅴ（医学科第４学年後期／必修科目）
履修者数：93　　配布数：93　　回収数：91　　回収率：97.8％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.5	4.5	4.3	4.1	4.0	3.6	3.8	3.7	3.9	3.8	3.7	3.8	3.8

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.7	3.9	4.0	3.7

＊評価に対するコメント

基礎医学実習Ⅴコーディネーター　**吉　田　貴　彦**

本実習の衛生学・公衆衛生学領域では学生グループごとに別個テーマによる研究実習（実験、調査など）が行われる。自由記載の意見にもあるようにグループで内容が異なるため、評価格差が大きい中での「満足度」3.7は良い方かと思う。各教員が３～４グループを担当し、異なるテーマに取り組むため指導時間が順番待ちとなり実習時間外の活動も多く学生・教員双方に負担がかかるが、より社会医学研究に近い実習を実践している都合上、許容願いたい。また、実習テーマが必ずしも全ての学生の希望にマッチしていない事と思うが、実習受け入れ機関、実習機器、担当教員数などの制約の中で行っていることで如何ともし難い。実習発表会にて自習体験を分かち合う事で妥協していただいている。実習発表会（学会口演準拠）、レポート（論文形式）も含め負担が多い実習のようで実施時期の検討の希望があった。法医実習には剖検の見学希望もあった。卒業後の研究に役立つ事を考慮に入れての自習計画であるが、今後より良い方向性を探って行きたい。

科 目 名：人間科学実習（看護学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：58　　回収率：96.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.3	4.9	4.5	4.1	4.4	4.0	4.1	4.0	3.9	4.1	3.9	3.8	3.5

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	4.1	4.1	4.1	4.0

＊評価に対するコメント

人間科学実習コーディネーター　**林　　要喜知**

本実習は、自然科学系３分野（即ち、生物学系、物理学系および化学系）からなる統合実習科目である。多くの学生は積極的かつ真面目に実習に取り組んできたため、学習意欲を高める内容であったといえる。学生評価項目の平均点は3.99であり、昨年度（3.83）や一昨年度（3.70）と比較すると、評価が次第に上昇している。しかし、学生の具体的なコメント内容をみると、様々な内容があった。最も多かった意見や要望は、レポートをチェックする効率性の悪さや、レポートの書き方指導の不統一性である。また、各教員による指導方法にばらつきがあるという指摘もあった。同時期に他の２つの実習を履修している学生の履修状況をも考慮し、これらの点はしっかりと改善したいと考えている。さらには、適切な数の教員配置や実習の展開時期についても、今後の検討課題として考慮しなければならない問題であろう。

科 目 名：生体観察実習（看護学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：60　　配布数：38　　回収数：35　　回収率92.1%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	4.9	4.5	3.8	3.9	3.2	2.9	2.8	3.6	3.9	3.2	3.1	3.4

問14	問15	問16	問17	問18
3.3	3.2	3.2	2.3	3.0

＊評価に対するコメント

生体観察実習コーディネーター　**岩　元　　純**

生態観察実習は、看護学科１年生後期の科目である。調査用紙の回収数が35と全体の６割弱であり、やや信頼に足る数に達していなかったのは残念であった。全体として満足かどうかの評価が3.0で「普通」との由。指導教員達の能力については、2.9とやや辛口か。また、学生の人権への配慮については2.3と手厳しい。実習の場では、個人レベルのぶつかりあいが生じてしまうこともあり、誤解をまねく発言は教員側も慎まなければならないが、さりとて、積極性の欠ける学生に注意を促す勇気を保持することも大切であろう。意外と思われる結果もあったので、いくつかその例を示しておく。実習書をよむなどの事前の準備については自己評価が3.8と比較的高く、積極的に参加したかという問いへの自己評価は、さらに高い4.5となっている。何人かの担当教員に聞いたが、首を捻りながら、「積極性」という言葉の捉え方の違いがあるようだとの感想であった。

科 目 名：基礎看護技術学Ⅰ（看護学科第１学年後期／必修科目）
履修者数：60　　配布数：58　　回収数：58　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.0	4.7	4.6	4.5	4.3	4.0	3.8	3.8	4.3	4.3	3.8	3.9	3.7

問14	問15	問16	問17	問18
4.1	4.0	4.1	3.4	3.9

＊評価に対するコメント

基礎看護技術学Ⅰコーディネーター　**一　條　明　美**

基礎看護技術学Ⅰは、第１学年に通年で開講している科目である。人間の日常生活に対する理解を深め、基礎的看護技術である日常生活の援助技術と診療に伴う技術を科学的根拠に基づいて習得することを目的としている。しかし、講義・演習の中だけで看護技術を身につけることは難しく、学生の自主的な学習が必要となる。

演習計画、演習内容に対する評価は、平均4.0であった。また、学生は講義・演習時間以外に看護技術の自己学習によく取り組んでいた。

評価の中で最も低い項目は、学生の人権に対する配慮であった。演習は、看護師役、患者役、観察者を置いて実施してる。健康とはいえ患者役となる学生に危険がないように、プライバシーが保護されるように、十分配慮している。また、学習が不足していると思われる看護師役の学生には、その都度、注意や指導を行っている。学生に誤解のないように留意するとともに、今後もよりよい講義・演習を目指して努力したい。

科 目 名：看護研究（統計学含む）看護学科第３学年通年／必修科目）
履修者数：68　　配布数：60　　回収数：57　　回収率：95.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
2.6	4.4	3.7	3.2	3.3	2.6	3.1	2.5	3.0	3.2	2.5	2.1	2.6

問14	問15	問16	問17	問18
2.6	3.1	3.4	3.5	2.9

＊評価に対するコメント

看護研究（統計学含む）コーディネーター　**望　月　吉　勝**

この科目では、開講時に説明し、その後も繰り返し述べましたが、研究のプロセスに関する知識とスキルを学び、４年生での卒業研究、さらには卒業後の勤務先での問題解決や研究につなげることを意図しています。そのために、「研究プロセスの一般論」「看護学領域での研究」「パソコンによるデータ解析演習」「第４学年の卒業研究発表会への参加」という４つのパートから構成しています。

この科目では、データの収集と分析のように具体的な手法を学ぶステップがあると同時に、学術上の新たな発見という研究本来の目的のために、２つの意味での「そうぞう」、つまりImaginationとCreationの鍛錬も含まれます。こうした多様さゆえに、努力する方向や到達点が分かり難いと感じたのかもしれません。また、情報処理実習室のコンピュータの入れ替えがあり、特に１月中は授業時間外に自由に使えなかったこともあり、不十分と感じたのかもしれません。

これまでも、図解教材の作成や、Goalとしての原著論文を教材とし、研究のステップを学ぶという授業構成など、創意工夫を重ねてきたつもりです。各パートの分担と各々の達成目標をもっと明確に示すことと、より分かり易い授業を目指したいと思います。

科 目 名：実践看護技術学（看護学科第３学年通年／必修科目）
履修者数：68　　配布数：67　　回収数：67　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.8	4.6	4.2	3.5	3.8	3.1	3.6	3.3	3.6	3.7	3.3	3.5	3.2

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.5	3.7	3.6	3.5

＊評価に対するコメント

実践看護技術学コーディネーター　**野　村　紀　子**

本学の理念を具体的に達成する方略として、また、文科省の意向を受けて、平成16年度のカリキュラムから開始した教科目である。３学年の後期と４学年の通年に実施される実習が、より効果的に行われることを目標としている。

実習に関わる５領域が、それぞれの領域を担当した。領域における授業展開は、学生からかなりの差があるとの意見も聞かれたが、その目標は達成できたものと考えている。

この結果を踏まえて、次年度からの各領域の創意工夫がより効果的な結果に繋がると考える。

臨地看護学実習企画に対する学生評価

あなた自身について	問1　事前に配布された資料を読むなど、予習をしましたか。 問2　実習に積極的かつ真面目に参加しましたか。
実習計画	問3　実習目的・実習目標はガイダンスで明確に示されましたか。 問4　実習はおおむねスケジュールに沿って行われましたか。 問5　学生数に対して指導教員数と実習指導者数は適切でしたか。 問6　指導教員と実習指導者の連携はとれていましたか。
実習内容	問7　実習の内容は、関連する講義科目と対応がとれていましたか。 問8　受け持ち患者の看護の難易度（コミュニケーションも含めて）は、適切でしたか。 問9　看護過程について、指導教員や実習指導者から適切な助言が得られましたか。 問10　看護技術を実践する機会が多く与えられましたか。 問11　カンファレンスで有意義な討議・討論が行われましたか。 問12　課された実習記録・レポートなどの量は適切でしたか。 問13　実習によって看護職者をめざす意欲が十分に高まりましたか。
実習環境	問14　実習場の設備・機材・用具・物品等は必要十分な質と量でしたか。 問15　安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問16　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問17　この実習は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 数：基礎看護学実習（看護学第1学年後期／必修科目）
履修者数：60　　配布数：60　　回収数：60　　回収率：100.0%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.1	4.5	4.5	4.6	4.4	4.1	4.3	3.8	4.1	3.2	3.9	3.9	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.2	4.3	4.2	4.3	

＊評価に対するコメント

基礎看護学実習コーディネーター　一　條　明　美

この実習は、入院患者の生活や患者が受けている看護援助を観察し、看護に対する興味と学習のモチベーションを高めることをねらいとしている。実習期間は5日間で、臨床の看護師と行動を共にし、患者の様子や行われている看護を観察することが主な実習内容である。「問13 看護職を目指す意欲が高まったか」、「問17 実習は満足できたか」は、共に4.3と評価は高く、実習のねらいは達成できたと考える。自由記載では、「命を扱う仕事という責任感も実感できた」「これからの学習意欲を高めるうえでとても有益な実習であった」「この実習で具体的にどのような学習に取り組めばよいか理解できた」などの記載があった。この学習意欲の高まりを維持し、次年度の臨地看護学実習につなげられるよう学生の努力に期待すると共に、より充実した授業・演習が展開できるよう努力したい。

科 目 名：看護過程論実習（看護学科第２学年後期／必修科目）
履修者数：61　　配布数：56　　回収数：56　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.8	4.8	4.6	4.5	4.5	4.3	4.4	4.2	4.6	3.5	4.1	3.9	4.1

問14	問15	問16	問17	問18
4.4	4.5	4.4	4.4	

＊評価に対するコメント

看護過程論実習コーディネーター　**一　條　明　美**

この実習は、学生が初めて１人の患者を受け持ち、看護過程を展開し、援助を実施するものである。「問１」「問２」の評価は共に4.8と非常に高く、学生は熱心にこの実習に取り組んでいたことがわかる。また、実習計画、内容、環境とも評価は高く、平均4.2であった。最も低い評価は、「問10 看護技術を実践する機会が多く与えられたか」3.5であった。これは、学生が受け持った患者の重症度は多様であり、日常生活を支える看護技術提供の必要性の幅が広いことが理由であろうと考える。看護技術を実践するためには、看護計画が立案できていなければならない。日々刻々と変化する患者を捉え、看護実践することは学生にとって難度が高い。しかし、実践は臨地実習でしか体験できない学習内容である。学生がこの貴重な機会を逃さないよう、学生個々の看護過程の展開状況を踏まえた指導が重要と考える。学生自らが立案した計画に基づき看護実践できるよう、これまで以上に臨地実習指導者との連携を図っていきたい。

科 目 名：老年看護学実習（看護学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：59　　配布数：50　　回収数：50　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	4.3	3.8	4.3	3.4	3.0	3.2	3.7	3.5	3.8	3.3	3.3	3.1

問14	問15	問16	問17	問18
3.4	3.6	3.4	3.4	

＊評価に対するコメント

老年看護学実習コーディネーター　**服　部　ユカリ**

評価結果を大項目別に分析すると、次のような内容であった。

「あなた自身について」は２項目とも４点以上であり、学生の自己評価は高く、例年の傾向と同じであった。「実習計画」では、「指導教員と臨床指導者の連携」についての評価は、他の項目と比較すると低くかろうじて「普通」であった。これについては、指導教員の数が諸般の事情により少なく、常勤の職員でない人やティーチングアシスタントを導入したため、常勤の指導教員ほどには臨床指導者との連携ができなかった為と思われる。今年度は全員常勤の助手が主に指導を担当している。この点では、16年度の学生には、結果的に例年と同じような条件の下で実習できなかったということであり残念であった。このことは、「実習内容」「実習環境」の評価にも影響していると考えられた。

「総合評価」は「普通」（３点）を上回る点数ではあったが、学生の意見も参考にし、よりよい実習になるよう改善していきたい。

科 目 名：小児看護学実習Ⅰ（看護学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：59　　配布数：50　　回収数：50　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.1	4.4	3.8	4.3	3.2	2.6	3.3	3.8	2.7	2.6	3.2	4.0	3.3

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.7	3.8	3.8	

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅰコーディネーター　**岡　田　洋　子**

高い評価項目は学生自身についてで、実習に積極的かつ真面目に参加した（4.4）であった。健康な小児の学習が終了した段階で実習が組まれるという学習の時期・順序性が、実習への動機付け・積極的参加につながっていると考える。低い評価項目は実習計画についてで、指導教員と実習指導者の連携（2.6）であった。子どもと接する体験が乏しく育ってきた学生にとって、病児を理解する学習の前提として、貴重な体験学習の機会となっている。

☆評価項目の実習内容は、病院実習と異なるためこの評価表を用いての評価には無理があります（問11・12除く）。

金曜日（寄校日）は実習の「まとめ」を行ない、要望等も聞いている。現行を続けたいと考えている。しかし、16年度に引き続き17年度も小児看護学講義時間数の減少を余儀なくされている。18年度以降の実習についてはその影響を評価し、再構築していきたいと考える。

科 目 名：地域保健看護学実習Ⅰ（看護学科第３学年後期）
履修者数：69　　配布数：50　　回収数：50　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.4	4.5	4.3	4.3	3.9	4.0	4.1	3.8	4.0	3.3	3.8	3.2	4.0

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.9	3.8	4.0	

＊評価に対するコメント

地域保健看護学実習Ⅰコーディネーター　**北　村　久美子**

実習の目的は、地域で生活する個人・家族・集団そして地域全体を対象とした看護活動の体験を含む学習をとおし地域保健・看護活動のあり方を考え、実践できる基礎能力を養うことにある。

実習は、10月、11月にわたり大学近郊の町役場（６カ所）、訪問看護ステーション（６カ所）で行った。例年、実習開始直前に行う指導者会議では、実習目的・目標・内容・方法、特に指導方法について協議し現場と大学とで実習の準備をし、また、実習終了後の３月には、実習指導の評価と翌年の実習準備に向けての検討を行っている。さらに、教育方法の改善として実習への動機づけと意欲、実践能力を高めるために、15年度から７月には実習先の町を学生に示し地区視診（地区診断）を行わせており、今年度からは実習前に看護技術演習を行い実技試験を実施した。

学生評価は、昨年度に比べると「問12」を除き、すべての項目においてかなり上昇した。特に「問５」「問６」は、1.0ポイント「問７」は0.6ポイントの増加が見られた。このことは、上記による指導者を交えて綿密な実習準備を行っていることや看護技術演習を取り入れ、教育方法等を改善したことによるものと思われる。

ここに、指導者はじめ多くの実習場所の職員の教育に対する熱意に感謝している。結果を指導者と共有し、今後もより有意義で効果的な実習になるよう努力していきたい。

科 目 名：成人看護学実習Ⅰ（看護学科第４学年通年／必修科目）
履修者数：59　　配布数：54　　回収数：49　　回収率：90.7％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.0	4.4	3.9	4.0	3.6	3.2	3.1	3.8	3.4	3.6	3.5	3.4	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	3.6	3.2	3.4	

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅰコーディネーター　**阿　部　修　子**

成人看護学Ⅰは、主に周手術期を対象に外科系病棟２病棟で実習を行っている。病棟が外科系病棟であるため展開が早いことや、１教員が２病棟を担当していることで、指導教員と実習指導者との連携、学生の人権に対する配慮に対する学生数評価が低いのかもしれない。講義との関連の評価も低く、教員は学生には既に講義で得た知識や学習方法などを実習に活用してほしいと考えているが、学生は患者が回復していく過程のイメージがつかみ難く、患者の変化に実習中に知識が追いついていかないことも要因として考えられる。今後は、学生の実習に対する満足度もあがるように病棟との連携を向上し、講義の中でも周手術期の看護に対するイメージを学生がもてるように工夫していきたいと思う。

科 目 名：成人看護学実習Ⅱ（看護学科第４学年通年／必修科目）
履修者数：59　　配布数：54　　回収数：48　　回収率：88.9％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.1	4.3	3.9	3.8	3.6	3.4	3.3	3.7	3.8	3.1	3.5	3.5	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.6	3.5	3.6	

＊評価に対するコメント

成人看護学実習Ⅱコーディネーター　**阿　部　修　子**

成人看護学Ⅱは、主に慢性疾患患者を対象に、内科系の２病棟で実習を行っている。比較的セルフケアレベルの高い患者を担当することが多く、こうした特徴から患者の直接的ケアが少ないため、看護技術を実施する機会が少ないと学生が評価したものと考えられる。（学生の自由記載のなかにも日常生活援助をする機会がなかったという意見も見られる）。しかし、慢性疾患患者の場合には、患者指導技術や、コミュニケーション技術、観察など看護技術を活用することが必要である。その点に関して学生の理解が得られなかった可能性もあり、実習目標や講義との関連等も含めて検討していく必要があると感じた。

科 目 名：母性看護学実習（看護学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：59　　配布数：54　　回収数：47　　回収率：87.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.2	4.4	4.0	3.6	3.7	3.3	4.0	3.5	3.4	3.6	3.5	3.3	3.2

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	3.7	3.2	3.4	

＊評価に対するコメント

母性看護学実習コーディネーター　**野　村　紀　子**

母性看護学実習は３週間の実習期間中、病棟と外来に実習場所を分けて実習を進めている。

結果は、総合評価の平均値が3.4点と無難な評価を受けた。各項目の平均値をみると、学生自身の予習状況、実習に対する姿勢、実習目的・目標の明確化の得点が高く、学生の意欲の高さが伺えた。実習開始当初に行うオリエンテーションは、学生の臨地実習に対するモチベーションを高めることに効果的と判断でき、今後も継続する予定である。

一方、指導教員・実習指導者との連携の適切さ、看護過程についての助言、学生の人権に対する配慮について平均値が低かった。学生が指摘する例は不明であるが、自由記述欄から推測すると、指導時の表現方法について数名から指摘があったことから、学生に意図が明確に伝わるように、十分なコミュニケーションをとって進める必要がある。学生自身の実習に取り組む姿勢は十分にあるため、魅力ある看護現場を学生に多く体験してもらえるように、実習指導者とともにさらに努力していきたい。

科 目 名：小児看護学実習Ⅱ（看護学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：59　　配布数：54　　回収数：47　　回収率：87.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.0	4.4	3.8	3.8	3.5	3.1	3.6	3.8	3.4	3.6	3.7	3.3	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.6	3.6	3.5	3.6	

＊評価に対するコメント

小児看護学実習Ⅱコーディネーター　**岡　田　洋　子**

高い評価項目はⅠ.と同様学生自身についてで、実習に積極的かつ真面目に参加した（4.4）であった。健康な小児に関する学習と保育園実習、健康問題を有する小児および家族に関する学習、さらにペーパーペイシェントによる事例展開、具体的なケア技術の演習、その後病院実習が組まれている。この学習の時期・順序性が、実習への動機付け・積極的参加につながっていると考える。

低い評価項目もⅠ.と同様実習計画についてで、指導教員と実習指導者の連携（3.1）であった。忙しい業務の中、病棟師長・臨床指導者の協力を得て実習指導にあたっている。教員が常に病棟にて指導にあたれる体制を希望している。小児看護担当教員は看護学科開設時より現在実質１名減である。学科の講義・演習から大学院の講義・演習までとなると、実習指導は助手に一任状態である（16年度は育児休暇）。小児看護担当スタッフ増を看護学科教官会議に提起しているが、小児領域まで解決に至っていない。自由記載に実習期間（病棟５日間・外来２日間）が短いという評価がみられた。昨年までは病棟８日間実習であったが、病棟編成変えの結果、今年度から５日間に減となった。もう数年、現行での実習を継続し評価をだしたいと考える。

科 目 名：精神看護学実習（看護学科第３学年後期／必修科目）
履修者数：59　　配布数：54　　回収数：47　　回収率：87.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
3.9	4.3	3.8	4.1	4.0	3.5	3.9	3.9	4.0	3.3	3.7	3.6	3.6

問14	問15	問16	問17	問18
3.5	3.7	3.7	3.8	

＊評価に対するコメント

精神看護学実習コーディネーター　**新　開　淑　子**

精神看護における援助技術は、患者と看護師の対人関係により成立する。つまり患者は看護師との関係が深まるにつれ、自分の内面をより一層表現し看護師と共に問題解決への道を歩もうとする。従って、看護師が患者との間に対人関係を発展させる能力を持ち合わせていないと、患者理解が表面的となり、共に問題解決への道を歩むことができない。学生は本実習の中で、患者との対人関係形成の難しさに直面し、悩むことが多い。本年度では、良好な患者－看護師関係を成立させるために必要な援助技法を具体的な達成項目として示し、学生の到達目標の明確化をはかった。今回の評価結果を見ると、問10の得点が低く、改善の効果が反映されていないように思われるが、患者－看護師関係形成技法も看護技術の一つであるという認識の低さが影響していると考えられる。今後精神看護に必要な援助技術とは何か、他領域との違いを明確にした上で、臨床実習指導者や指導教員が協働し、学生指導に反映されるよう検討していきたい。

科 目 名：地域看護学実習Ⅱ（看護学科第４学年後期）
履修者数：71　　配布数：69　　回収数：69　　回収率：100.0％

＊評価結果（平均）

問１	問２	問３	問４	問５	問６	問７	問８	問９	問10	問11	問12	問13
4.4	4.5	4.3	4.3	3.0	3.7	4.0	3.8	4.2	3.0	4.3	3.5	3.9

問14	問15	問16	問17	問18
3.7	4.0	4.3	4.2	

＊評価に対するコメント

地域看護学実習Ⅱコーディネーター　**北　村　久美子**

実習の目的は、「公衆衛生行政機関としての保健所の役割・機能を学ぶと共に公衆衛生に関わる看護の役割・機能を理解する」としている。

開学当初は、８カ所の道立保健所で実習が行われていたが、今年度は、根室・岩内・富良野・上川の４道立保健所で行われた。学生評価は、昨年度に比べると「問５」を除き、すべての項目において0.5ポイント前後の上昇が見られた。昨年、学生の満足度が最も低かった「問10（2.6ポイント）」の看護技術実践に関しては教育内容の改善策を講じた結果、3.0ポイントに達した。例年、６月に当大学にて保健所の実習指導者と教員による会議を開催し、学生の主体性を尊重し学生自身による実習目標の到達をめざした実習内容およびプログラム（案）を作成させ、その後、実習指導者と教員、学生との三者で実習計画を作成していいる。このような教育方法についても「問２」「問４」「問11」「問16」「問17」などから、実習の成果を上げ一定の評価を得られたものと思われる。

しかし、学生の満足度が低下した「問５」であるが、来年度は実習保健所が減るため、一施設に対し学生数がさらに増加することが予想され教育方法が新たな課題となるであろう。このような現象は、全国的に共通する問題でもあり、道内においても看護系大学の増加に伴い、道庁が各大学に実習保健所を指定し、当大学ではすでに２保健所の指定を受けた。そのため、実習目的・目標・内容・方法などを実習指導者と教員で再検討を行い学生にとって満足できる教育方法のより一層の工夫が必要となった。これに関連して実習指導者から、「より効果的な実習を進めるべく実習開始前の指導者会議を現状の１回から２回に増やしてほしい」という厚意的な要請があった。学生実習に対する現場の熱意に感謝すると同時に、めまぐるしく変化する行政施策、社会情勢を視野に入れたカリキュラム運営に努め、今後も学生にとってより充実した実習となるよう創意工夫をしていきたい。

体育実技企画に対する学生評価

あなた自身について	問1　授業に毎回出席しましたか。 問2　授業中は積極的かつ真面目に実技に取り組みましたか。
授業計画	問3　授業はおおむねスケジュールに沿って行われていましたか。 問4　履修要項は適切なものでしたか。 問5　学生数に対して指導教員数は適切でしたか。 問6　指導担当者間の連携は適切でしたか。
授業内容	問7　各回の事前指導は、実技を行うにあたって適切でしたか。 問8　教員の指導は、技術を向上させるうえで適切でしたか。 問9　実技によって基礎的な技術を習得できましたか。 問10　要求された実技の難易度は適切なものでしたか。
授業環境	問11　実技用の設備・機材・用具などは性能と量の面で十分でしたか。 問12　安全に対する適切な指導と配慮がなされていましたか。 問13　学生の人権に対する配慮がなされていましたか。
総合評価	問14　この授業は全体として満足できるものでしたか。

⑤　強くそう思う（非常に良い）
④　やや思う（良い）
③　どちらとも言えない（普通）
②　あまりそう思わない（あまり良くない）
①　全くそう思わない（良くない）

科 目 名：体育実技（選択科目通年）
履修者数：20　　配布数：19　　回収数：18　　回収率：94.7%

＊評価結果（平均）

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13
4.7	4.5	4.5	4.3	4.5	4.5	4.2	4.2	4.1	4.2	4.1	4.3	4.3

問14	問15	問16	問17	問18
4.4				

＊評価に対するコメント

体育実技　杉　山　喜　一

講義内容として、主として球技やバドミントン、スキー等のスポーツ活動を中心とする実技のほか、適宜運動処方や体力作り等を導入した。学生自身の健康に対する意識や身体を動かすことへの欲求が高かったこともあり、ほとんどの受講生は、授業に対して非常に熱心に取り組んでくれたと思う。授業態度や出席状況においても特に問題はみられなかった。今回の調査結果では、4.1～4.7の範囲で、全ての項目で4以上の評価が得られた。おそらく今年は比較的少人数による学生指導であったことや、講義内容についても、ある程度学生の要求を満たすものであったといえる。ただ選択によるスポーツ種目に関しては制限があり、今後はできるだけ多くの学生のニーズに応えられるように検討していきたい。なお例年のことではあるが、本講義が、講義・実技で45時間の内容構成で1単位という制約も学生にとっては若干不満のようであった。来年度は、スキーをはずし、30コマ1単位ということで授業内容もスリム化されることになるが、あらためて学生の授業評価について注目していきたい。

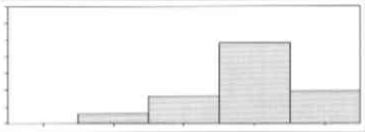
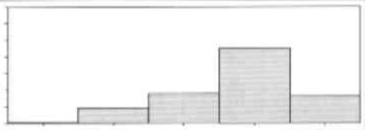
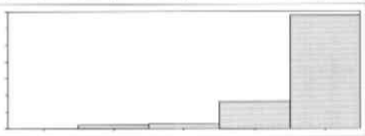
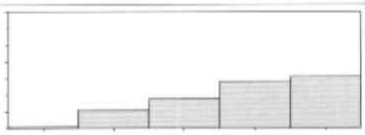
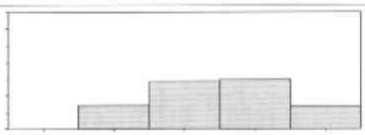
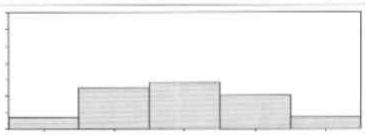
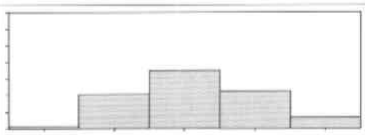
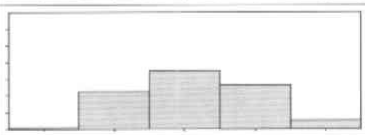
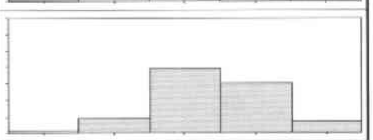
寄　稿

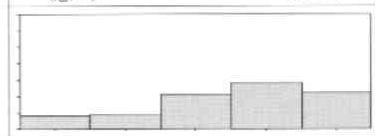
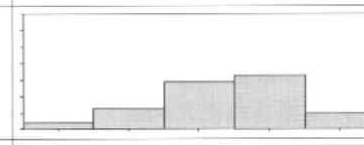
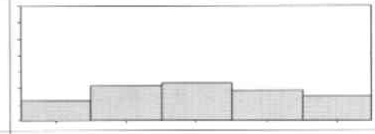
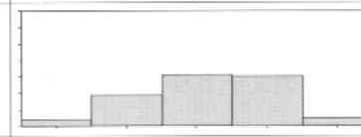
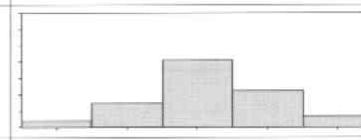
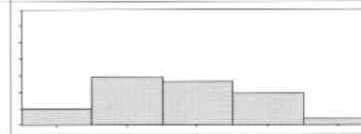
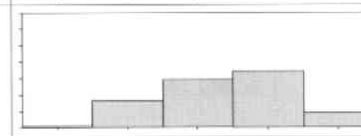
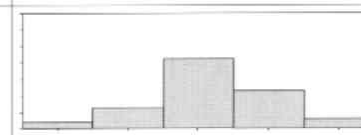
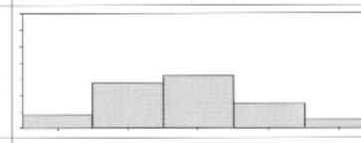
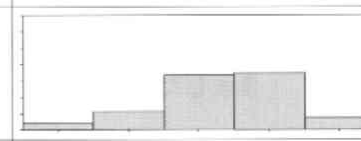
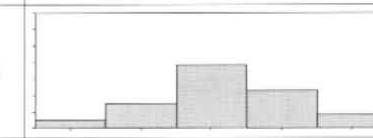
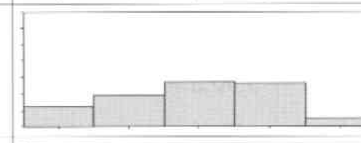
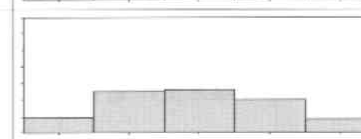
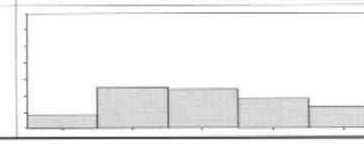
チュートリアルⅡ

健康科学講座教授　吉　田　貴　彦

チュートリアルは統合科目ではないため授業評価の対象ではありませんが、学生諸君から要望があったので独自に評価項目を設定して調査しました。チュートリアルⅠとⅡはその到達目標を異にしているが、連続的に実施されたために戸惑いがあったものと思われます。すなわちチュートリアルⅠでは、課題に関連した知識を身につけたかが評価の対象で試験またはレポートによる評価が併用されました。しかし、チュートリアルⅡでは、自学自習の態度の修得をさらに推進する他に、課題から問題点を抽出し学習計画を作成する事、コミュニケーション能力の修得、グループ活動能力の修得等といった態度・能力（技能）についてチューターの観察によって評価を行いました。こうした評価法に慣れていなかった学生が多かった事が見て取れます。特に試行的に実施したディベート意義を認めた学生もありましたが、多くの学生は対応し切れなかったようです。チュートリアル教育は現在改革中であり、今後より良いものに改善していきたいと考えます。

2004年度　チュートリアルⅡ学生評価

設問	設　問　内　容	平均点	そう思わない（悪い）←度数分布→そう思う（よい）
問1	事前にガイドをよく読み、事前説明を良く聞きましたか。	3.90	
問2	チュートリアルⅡで身につけるべき行動目標（ガイドに記載）を理解していましたか。	3.74	
問3	チュートリアルの出席状況はどうでしたか。	4.69	
問4	グループディスカッションに積極的に加われましたか。	3.87	
問5	チュートリアルⅡでの諸注意（ガイドに記載）を実行できましたか。	3.49	
問6	自学自習のための週8時間の時間帯を、自学自習に用いましたか。	2.94	
問7	チュートリアルガイドや事前説明で示されたチュートリアルⅡの履修目的は、明確で理解が出来るものでしたか。	3.13	
問8	チュートリアルⅡで求められた行動目標（ガイドに記載）の難易度は適切でしたか。	3.13	
問9	チュートリアルⅡの自己評価表の評価項目は適切でしたか。	3.36	

設問	設　問　内　容	平均点	そう思わない（悪い）←度数分布→そう思う（よい）
問10-1	課題1について（喫煙をめぐる動き） 自学・自習・討論しやすい内容でしたか。	3.53	
	討論すべき分量と当てれらた時間は適切でしたか。	3.36	
	ディベート・テーマは討論しやすいものでしたか。	3.03	
問10-2	課題2について（医学研究をめぐる諸問題） 自学・自習・討論しやすい内容でしたか。	3.15	
	討論すべき分量と当てれらた時間は適切でしたか。	3.15	
	ディベート・テーマは討論しやすいものでしたか。	2.75	
問10-3	課題3について（新興感染症をめぐる問題） 自学・自習・討論しやすい内容でしたか。	3.38	
	討論すべき分量と当てれらた時間は適切でしたか。	3.16	
	ディベート・テーマは討論しやすいものでしたか。	2.78	
問10-4	課題4について（我々を取り巻く環境と健康問題） 自学・自習・討論しやすい内容でしたか。	3.33	
	討論すべき分量と当てれらた時間は適切でしたか。	3.16	
	ディベート・テーマは討論しやすいものでしたか。	2.92	
問11	チュートリアルⅡ全体の内容は今後の学習意欲を増すものでしたか。	2.92	
問12	チュートリアルⅡは全体として満足できるものでしたか。	3.03	

教　授　紹　介

就　任　挨　拶

産婦人科学講座教授
千　石　一　雄

平成17年４月１日付けで、石川睦男現附属病院長の後任として産婦人科学講座教授を拝命いたしました。清水元学長、石川病院長により築き上げられてまいりました伝統を継承すると同時に、産婦人科学講座ならびに本学のさらなる発展のため微力ではありますが、全力を尽くす所存であります。よろしくお願いいたします。私は昭和54年本学の一期生として卒業し産婦人科学教室に入局いたしました。大学院に進学し、臨床研究に取り組むと同時に、道立紋別病院、士別市立病院で産婦人科全般の臨床研修を受けております。その後、米国ミシガン州立大学内分泌研究所に留学し、リス猿の体外受精を中心に、受精、初期胚発育機構など生殖生物学に関する研究に従事しました。留学から帰国した当時、ヒト体外受精の臨床応用が世界的にも注目され始めていた時期でもあり、また、生殖医学領域の研究を行って参りました経緯から、その後、生殖医療を中心に診療・研究を進めております。

臨床面では、これまで不妊治療を中心に、体外受精に代表されます生殖補助医療技術成績の向上、新たな生殖技術の開発に取り組むとともに、妊孕能の温存、機能再建を目的とした手術を手掛けてまいりました。また、早期より腹腔鏡、子宮鏡、卵管鏡などの内子鏡手術を取り入れ、より侵襲の少ない手術を目指しております。研究面では、受精機構を中心に卵細胞膜における多精子受精防御機構、卵細胞膜と精子の結合、融合に関する接着因子の役割、また、最近では精子形成遺伝子および初期卵胞発育に関与する遺伝子の同定ならびに機能解析を進めております。

今後は、大学臨床講座の責務であります先進的医療、先端的研究を推進すると同時に、優れた医師の育成に取り組み、良質かつ安全な医療の提供を目指していきたいと考えております。具体的には臨床面では、内視鏡を用いた悪性腫瘍手術、胎児治療、新たな生殖医療技術の開発など、旭川医科大学産婦人科でなければできない治療の開発に取り組むと同時に、道東・道北圏を中心とした母体搬送システム、生殖医療ネットワークの構築、さらには、婦人科手術および分娩のオープンシステムの導入も考慮したいと考えております。研究面では、生殖医学領域ならびに婦人科悪性腫瘍の研究を継続、発展させることはいうまでもなく、産婦人科学特有の受精から胎児、新生児までの生理、発達に関する研究、特に臨床に還元できるoriginalityに富んだ基礎的・臨床的研究を推進したいと考えております。教育面では、学部教育から卒後研修まで一貫し、高度な知識、技術をもって国際的にも評価される専門医を育成する教育体制づくりを目指し、また、教室の運営に関しては透明性を確保し、教室および各個人が国際的に評価されるアクティビティーの高い教室作りを目指す所存です。

現在、産婦人科医療は産婦人科医師数の減少、高齢化などで特に産科医療は全国的にも危機的な状況になっております。したがって、今後、勤務条件の改善、女性医師の妊娠・分娩・育児をサポートできるフレクス勤務体制の導入などに取り組むことはもちろん、学生諸君に対し、産婦人科学が如何に魅力あるものであるかを示すことが重要であると認識しております。一人でも多くの若き産婦人科医を育成することが私に課せられた重要な使命であり、達成すべく尽力する所存です。

泌尿器科診療、研究、教育のさらなる発展を目指して

泌尿器科学講座　教授
柿　崎　秀　宏

本年6月10日付けで泌尿器科学講座教授を拝命しました。泌尿器科学講座としては、初代の黒田一秀教授、前任の八竹　直教授（現学長）に続いて3代目の教授となります。

これまでの泌尿器科学講座の伝統を踏まえ、かつ新しい風を吹き込むことで、本学における泌尿器科研究および教育のさらなる充実と大学病院における泌尿器科診療の発展を目指します。

これらを通じて、本学の発展に努力する所存ですので、よろしくお願いいたします。

私は昭和58年北海道大学を卒業し、北海道大学泌尿器科学教室に入局しました。卒後5年間の一般研修の後に北大病院に戻り、排尿障害、小児泌尿器科、腹腔鏡手術、泌尿器系悪性腫瘍に対する拡大手術を中心として臨床経験を積んできました。排尿障害の領域では、前立腺肥大症に合併する膀胱機能異常の解明と治療、二分脊椎症患児の排尿管理、神経因性膀胱における膀胱拡大術などの発展に努めてきました。小児泌尿器科の領域では、外陰の先天異常の代表である尿道下裂に対する1期的尿道形成手術を多数例で施行してきました。また先天性上部・下部尿路疾患に対する様々な形成手術を行ってきました。現在、副腎摘出の標準術式は鏡視下手術（腹腔鏡手術）であり、早期の腎癌や腎盂・尿管腫瘍の手術も鏡視下手術として施行される機会が増加しています。大学病院においてもこのような時流に遅れることなく、鏡視下手術を定着させる所存です。今後は、小児泌尿器科、泌尿器科悪性腫瘍に対する集学的治療、鏡視下手術、難治性尿路結石の診療、難治性排尿障害の治療の各分野において、道北の基幹病院としての役割を果たすとともに、大学病院として高度先進的な新しい医療に挑戦していきたいと思います。腎泌尿器外科として手術件数の増加をはかり、外科系講座として魅力ある教室を作って行くのが当面の目標です。

医学部学生に対する卒前教育においては、泌尿器科におけるcommon disease（尿路感染症、泌尿器系悪性腫瘍、排尿障害、尿路結石、腎機能障害など）の理解に重点をおきたいと思います。泌尿器科には内科的要素と外科的要素が含まれます。臨床実習においては、術前・術後カンファランスと手術への参加を通じて、その両方の知識と経験の習得を目指します。

私の学生時代はまだ比較的おおらかな時代で、卒前教育は無論のこと、卒後教育についても現在ほど真剣に議論されなかった時代でした。学生時代に手取り足取りという教育を受けなかったことは、逆に卒業後は自分で真剣に学ぶ姿勢を身につける結果となりました。効率的に教育することは非常に重要ですが、あまりに教えすぎると学生にはただ記憶する作業だけが残るのではないかと危惧しています。本学ではチュートリアルも導入されていて、学生が自ら学ぶ姿勢が確立されやすい環境があると思いますが、自主的な学習のmotivationを刺激するような教育を実践していきたいと考えています。

私は学生時代はアイスホッケー部に所属し、青春を謳歌しました。卒業後12年目から2年余り米国ペンシルヴェニア州ピッツバーグ大学に留学しましたが、留学中もアイスホッケーを楽しみました。現在も暇をみつけては、体力の維持に努力しています。部活動は学生生活を豊かにしますので、今後は機会を見つけて学生の部活動を応援していきたいと思っています。

助教授紹介

脳神経外科学講座　助教授
程　塚　　明

本年４月１日より脳神経外科学講座助教授に昇任致しました、程塚　明と申します。どうか宜しくお願い致します。私は本学４期卒業生で、外見からは意外なようですが、学生時代は硬式庭球部に所属しておりました。講座内では、腫瘍班を務め、主にてんかんの病理や脳腫瘍の増殖能などについて研究しております。また最近は、中国やインドネシア、インドなどアジア諸国の若手脳神経外科医の教育や手術指導にも参加させていただいております。一方、当科の性格上、また最近は救急部の拡充のおかげをもちまして、脳卒中や頭部外傷などの急患のウェイトが日増しに高くなってきております。今更ながら学生時代に体育会で体を鍛えておいてよかったなと（その分勉学が疎かでしたが）思う今日この頃です。さて、当科の診療もやはりチーム医療です。多くの分野の皆様のご協力やご理解があって初めて成り立っております。この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げますと共に、今後ともどうか宜しくお願い申し上げます。

解剖学第１講座　助教授
濤　川　一　彦

今春、４月に着任いたしました。生まれてから大学までは関東で過ごしましたが、大学院時代より大阪－旭川と１往復し、今回、再び旭川医大で仕事をさせていただく機会を得ました。

これまでの研究生活では、分子生物学的手法や組織学的手法を用いて神経再生の分子メカニズムの解析を行ってきました。

現在は、マクロファージの神経再生への寄与に興味を持ち、研究を続けております。

今後、研究、教育上で皆さんのお世話になることも多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

看護学科母性看護学・助産学　助教授
黒　田　　緑

北海道で生活するのは初めてです。関東で暮らしていたものが旭川の冬をどう過ごすか楽しみです。

助産師として臨床では多数の出産にかかわってきました。１人として同じでない出産は今でも感動します。

母性看護学・助産学では問題解決思考をいかに伝えるかを根底に置き学生に接してきました。

また、医療の中だけにいて“井の中の蛙”ではいけないと思い社会学を学びました。

現在助産師教育のあり方をテーマにしています。

内科学第二講座　助教授
伊　藤　博　史

私は本学の５期生ですが、第二内科に入局後、研修期間を終えてから、糖尿病グループの仲間に入れていただき、あっという間に約20年が経ってしまいました。専門とするところは、糖尿病性神経障害の分野です。当教室の三代目教授の羽田先生は、初めての糖尿病を専門とする教授であり、あらためて、生活習慣病を中心に位置付けた活動が広がっていくように努力したいと存じます。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

産婦人科学講座　助教授
山　下　　剛

本学９期卒業です。臨床、研究とも婦人科悪性腫瘍を専門領域としています。悪性腫瘍に対する治療姿勢には生存率向上と副作用軽減の２つの観点があり、当科では後者の観点から腹腔鏡手術を積極的に治療に取り入れてきました。これらの実績が認められ、９月から高度先進医療として子宮頸癌に対する腹腔鏡下広汎子宮全摘術への適応が日本で初めて認可されました。

これらの技術を紹介し、また後輩に伝えていくためにも皆様方のご協力をいただきたく思います。

今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

泌尿器科学講座　助教授
橋　本　　博

私は昭和55年卒業の２期生で、学生時代は剣道部に所属し耳鼻科の野中先生らと汗を流しました。現在はOB会会長を務め、学生の皆さんと接する機会も多く、うれしく思っております。

卒業後は主として尿路や男性性器の悪性腫瘍について勉強してきました。

他の領域同様進行がんの治療には苦労しており、いわゆる集学的治療に当たっては他科の先生にしばしばお世話になっております。

この場を借りて御礼申し上げます。今後も教育・診療の充実に努めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

学生団体一覧

平成17年度承認された学生団体は以下のとおりです。

【体　育　系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考		団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	ラグビー部	27	医4	坂井　利彦	原渕　保明	継続	26	アイスホッケー部	27	医4	佐藤　剛	松野　丈夫	〃
2	準硬式野球部	25	医4	鈴木　幸雄	吉田　晃敏	〃	27	男子ハンドボール部	24	医3	佐藤　槙	上口勇次郎	〃
3	卓球部	27	医4	小針　隆志	谷口　成実	〃	28	ビリヤード研究会	18	医5	大野　晋治	上口勇次郎	〃
4	陸上競技部	20	医4	柳町　剛司	鈴木　裕	〃	29	女子ハンドボール部	31	医3	新沼　花恵	上口勇次郎	〃
5	競技スキー部	30	医4	大原　賢三	小川　勝洋	〃	30	ピクニック同好会	12	医4	伊藤　愛子	近藤　均	〃
6	ゴルフ部	45	医4	平井　俊浩	紀野　修一	〃	31	トライアスロン部	27	医4	坂井　利彦	本間　龍也	〃
7	硬式庭球部	40	医4	阿部　紘丈	程塚　明	〃	32	インラインホッケー部	31	医4	長沼　英和	松野　丈夫	〃
8	バドミントン部	48	医4	堀　哲也	川村祐一郎	〃	33	スキューバ・ダイビング部	10	医3	松倉　圭佑	林　要喜知	〃
9	男子バスケットボール部	20	医4	坂田　太	千葉　茂	〃	34	草野球同好会	40	看4	飴村　光	林　要喜知	〃
10	空手道部	17	医3	松坂　法奈	相澤　仁志	〃	35	HMS～総合格闘技同好会～	24	医4	浅野目　卓	小川　勝洋	〃
11	サッカー部	35	医4	福岡　聖大	菊池健次郎	〃	36	ボーリング同好会	19	医3	川谷　圭司	廣岡　憲造	〃
12	男子バレーボール部	16	医4	平湯　恒久	東　信良	〃	37	ツーリング同好会	11	医3	猪子　和穂	林　要喜知	〃
13	剣道部	20	医4	小島　大英	平野　史倫	〃	38	乗馬クラブ	11	医3	平沙　代子	羽田　勝計	〃
14	山岳部	17	医4	雨宮　優	佐藤　啓介	〃	39	釣同好会	27	医4	坂井　利彦	原渕　保明	〃
15	弓道部	32	医4	藤田　弘之	吉田　逸朗	〃	40	ボクシング部	6	医3	柴田　昌幸	林　要喜知	新規
16	ワンダーフォーゲル部	12	医3	相川　忠夫	山内　一也	〃	41	柔道部	7	看3	一坊寺歩美	原渕　保明	〃
17	大東流合気道部	22	医4	平田　理智	林　要喜知	〃	42	ビーチバレー同好会	16	医2	山崎　貴弘	東　信良	〃
18	ソフトテニス部	54	医4	藤林　周吾	石子　智士	〃	43	ヨガ部	21	医3	内山　江美	谷口　隆信	〃
19	水泳部	69	医4	児玉　暁	羽田　勝計	〃	44	遊泳部	10	医4	児玉　暁	羽田　勝計	〃
20	基礎スキー部"SNOW INJECTION"	31	医4	阿部　紘丈	油野　民雄	〃	45	遠泳部	10	医4	児玉　暁	羽田　勝計	〃
21	サイクリングクラブ"ちゃりんこ"の会	9	医4	馬渡みずほ	山崎　浩	〃	46	ダンスBu	50	医2	姫野　愛子	林　要喜知	〃
22	女子バスケットボール部	20	医3	宮本　寛子	千葉　茂	〃	47	S. Drive	42	医3	羽中田鉱司	谷口　隆信	〃
23	ソフトボール同好会	13	医4	大原　賢三	近藤　均	〃	48	スケボーサークル	5	医3	大沼　禎史	林　要喜知	〃
24	マラソンクラブ	5	医4	柳町　剛司	鈴木　裕	〃	49	山歩（さんぽ）の会	5	医3	新井　美成	林　要喜知	〃
25	女子バレーボール部	19	医3	本田　梨乃	谷木　光穂	〃		４９団体	1157				

【文　科　系】

	団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考		団体名	会員数	責任者 学年	責任者 氏名	顧問教官	備考
1	写真部	15	医3	四枚田耕平	谷本　光穂	継続	18	シネマ同好会	17	医5	師尾　典子	渡部　剛	〃
2	医療研究会	17	看3	田中　緑	宮本　和俊	〃	19	盆栽部	28	医4	上森　元気	布村　明彦	〃
3	茶道部	24	医3	辻　明日香	坂本　尚志	〃	20	民族文化研究会	25	医4	政田　賢治	吉田　成孝	〃
4	将棋部	10	医2	巽　亮二	上口勇次郎	〃	21	道の駅研究会	48	医4	芹川　真哉	川村祐一郎	〃
5	JAZZ研究会	11	医3	四枚田耕平	佐賀　祐司	〃	22	図書館部	15	医2	野田　裕未	近藤　均	〃
6	ギター部	20	看3	田中　緑	平　義樹	〃	23	ESS	20	医3	浦上　希更	シャロン・ハンリー	〃
7	ロック研究会	30	医4	熊井　琢美	吉田　成孝	〃	24	MAK	34	医2	佐藤　司	高井　章	〃
8	聖書研究会	6	医2	江口　耕平	内藤　永	〃	25	温泉研究会	27	医3	坂谷　慧	谷口　成実	〃
9	ブラスアンサンブル	34	医3	三浦　尚友	高井　章	〃	26	文芸部	7	医5	西澤　千津	近藤　均	〃
10	室内合奏団	42	医4	齋藤　一朗	高井　章	〃	27	形態学研究会	12	医6	暮地本宙己	渡部　剛	〃
11	旅芸人倶楽部	27	医4	坂井　利彦	原渕　保明	〃	28	小児Σボランティアクラブ	5	看3	田中　緑	岡田　洋子	〃
12	合唱部	53	医3	小笠原　卓	小川　勝洋	〃	29	FFC(ファイターズファンクラブ)	21	医4	豊島雄二郎	近藤　均	〃
13	旅と鉄道研究会	9	医6	市來　一彦	平　義樹	〃	30	AMCチェロアンサンブル	14	看2	越智由利恵	高井　章	新規
14	華道部	13	医2	山口　陽平	中村　正雄	〃	31	Vリーグ研究会	16	医3	辻榮　克也	東　信良	〃
15	AMC2(エイエムシースクウェア)	10	医4	馬渡みずほ	橋本　眞明	〃	32	ボランティア部	10	看3	田中　緑	平　義樹	〃
16	かるた会	5	医3	田原　大地	松岡　悦子	〃		３２団体	620				
17	国際保健医療研究会	5	医2	島澤　明子	吉田　貴彦	〃							

新入生合同研修会実施される

今年も新入生の合同研修会が、４月18日（月）、19日（火）の２日間にわたり本学で行われました。

１日目は、９時から看護学科棟大講義室にて各グループごとに着席し、塩野副学長の挨拶に始まり、学年担当の数学山内教授からオリエンテーションを受けた後、医学科そして看護学科は場所を変えて、ともに今後の学習展望及び医療従事者としての心構えの説明を受けました。

午後からは、旭川消費者協会副会長の宮島睦子氏による「悪質商法の実態と防止策」、本学医学部微生物学講座の若宮伸隆教授による「エイズの現状とその課題について」、同じく本学医学部内科学第三講座の大竹孝明助手による「お酒との正しいつきあい方」、及び本学医学部内科学第一講座の長谷部直幸助教授による「医学生らしい～　　」などの講演を聴き１日目は終了しました。

２日目の午前は、各グループに分かれ、「主体的な学習への取り組み方について」又は「どの様な医療従事者者を目指したいか」という課題についてのグループ討論とその発表会から始まりました。最初は新入生ということで慣れないなか、ぎこちない点も見られましたが、やがてうち解けあうと討論も真剣さを増し次第に白熱し、また、発表するにあたり、流暢なスピーチをこなし聴衆をうならせる者や、イラストなどに隠れた才能を発揮する者がいるなど、意外な一面もかいま見られました。

午後からは、各班に分かれ救急蘇生実習及び手話の講習を受け、ぎこちない動きの中にも医療現場にたずさわる者としての雰囲気を十分に味わいました。

（学生課）

平成16年度　成績優秀者の表彰式

平成16年度から新設されました成績優秀者の表彰式が３月25日（金）に挙行された学位記授与式の中で行われました。

今回は第一回目ということもあり、医学科３名、看護学科４名、合わせて７名の成績優秀者が選出され、学長から一人ひとりに記念の盾が授与されました。

（学生課）

平成16年度　学位記授与式

平成16年度学位記授与式が３月25日（金）10時30分から本学体育館において挙行されました。

式では荘厳な雰囲気のもと、本学室内合奏団が奏でる調べのなか、医学科101名、看護学科71名、合わせて卒業生172名の各代表者へ、学長から学位記が授与されました。引き続き、博士課程修了者10名、修士課程修了者12名の各代表者へ博士学位記及び修士学位記が授与されました。

ついで、学長から卒業にあたり、式辞が述べられました。　（学生課）

平成17年度 入　学　式

医学科・看護学科の入学式が４月８日（金）10時から本学体育館において挙行されました。

式では、医学科90名、看護学科60名、看護学科編入学１０名合わせて160名の新入生を代表して医学科青木亜美さんが宣誓を行い、医学生・看護学生としての自覚を新たに、大学生活の第一歩を踏み出しました。　（学生課）

博士学位記授与式

平成17年度博士学位記授与式が、６月30日（木）午前10時から学長室において行われ、次の５名に医学博士の学位が授与されました。

課程博士（３名）　間宮　敬子、菅原　亮一、小泉　一也
論文博士（２名）　髙橋　　啓、原田　広文

（学生課）

授業料未納による除籍について

授業料を２期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成17年10月１日において授業料を２期以上滞納している場合、平成18年３月31日をもって除籍となります。

以後授業料納期である６か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご留意ください。

（学　生　課）

学生等のセクシュアル・ハラスメント相談員

・学生等のセクシュアル・ハラスメントの相談員は次の方々です。
・任期は平成19年３月31日までとなっています。

☆一般教育　助教授　松岡　悦子
☆基礎医学　教　授　高井　　章
☆臨床医学　助教授　伊藤　　浩
☆看護学科　教　授　服部ユカリ
☆保健管理センター
　助教授　川村祐一郎
　保健師　藤尾美登世

（学　生　課）

卒業生の動向（医学科）

平成17年３月25日（金）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。　（学生課）

区分		臨床研修先等	平成16年度		
			男	女	計
進学	道内	旭川医科大学大学院	0	0	0
	道内外その他		0	0	0
	小計		0	0	0
就職	道内	旭川医科大学	17	1	18
		北海道大学	5	1	6
		旭川厚生病院	4	0	4
		市立旭川病院	2	2	4
		その他	19	10	29
	計		49	15	64
	道外	大学関係病院	7	2	9
		上記以外の病院	13	6	19
	計		20	8	28
	小計		69	23	92
未定・その他			6	3	9
合計			75	26	101

上記以外の病院名

道　内：札幌医科大学、勤医協中央病院、室蘭日鋼記念病院、市立札幌病院、札幌東徳州会病院、北海道社会保険病院、帯広厚生病院、釧路赤十字病院、札幌厚生病院、北海道がんセンター、国立札幌病院、旭川赤十字病院、北見赤十字病院、釧路労災病院、名寄市立病院、ＮＴＴ東日本札幌病院、函館中央病院、五稜郭病院、恵佑会札幌病院、菊名記念病院

道　外：東京大学、東京医科歯科大学、筑波大学、千葉大学、愛媛大学、横浜市立大学、埼玉医科大学、奈良県立医科大学の附属病院、横須賀共済病院、新潟市民病院、岩手県立病院、仙台市立病院、千葉県立病院、石川県立病院、長野県中央病院、福岡徳州会病院、三井記念病院、大手前病院、公立富岡総合病院、千葉西総合病院、岐北厚生病院、利根中央病院、沼津市立病院、岸和田徳州会病院、由利組合総合病院

卒業生の動向（看護学科）

平成17年３月25日（金）に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。　（学生課）

区分		大学及び病院名等	平成16年度		
			男	女	計
進学	道内	旭川医科大学大学院	0	1	1
	道内外その他		0	2	2
	小計		0	3	3
就職	道内	旭川医科大学	0	16	16
		北海道大学	0	4	4
		旭川厚生病院	0	5	5
		市立札幌病院	0	2	2
		その他	0	21	21
	計		0	48	48
	道外	大学関係病院	1	13	14
		上記以外の病院	2	3	5
	計		3	16	19
	小計		3	64	67
未定・その他			0	1	1
合計			3	68	71

上記以外の病院名

道　内：勤医協中央病院、室蘭日鋼記念病院、札幌東徳州会病院、北海道社会保険病院、旭川赤十字病院、札幌厚生病院、江別市立病院、遠軽厚生病院、医療法人社団慶愛病院、手稲渓仁会病院、東札幌病院、ＮＴＴ東日本札幌病院、大滝村役場、利尻富士町役場、和寒町保健福祉センター、札幌市自治研修センター、中富良野町、道立保健所（室蘭市）

道　外：日本医科大学千葉北総病院、東海大学医学部附属病院、北里大学病院、自治医科大学附属病院、千葉大学医学部附属病院、聖路加国際病院、神奈川県こども医療センター、東京慈恵会医科大学附属病院、東京医科大学八王子医療センター、横浜市立大学附属病院、神戸アドベンチスト病院、ＮＴＴ東日本関東病院、筑波大学附属病院、相澤病院

教員の異動

辞職	17.3.31	小児科学講座	助教授	伊藤善也
		泌尿器科学講座	助教授	金子茂男
		脳神経外科学講座	助教授	中井啓文
		第二内科	講師	横山和典
		第二外科	講師	小原充裕
		眼科	講師	森 文彦
転出	17.4.1	内科学第二講座	助教授	中村公英
		看護学講座	講師	安川 緑
昇任	17.4.1	産婦人科学講座	教授	千石一雄
		脳神経外科学講座	助教授	程塚 明
		小児科学講座	講師	蒔田芳男
		第一内科	講師	中野 均
		第三内科	講師	渡 二郎
		第二外科	講師	星 智和
採用	17.4.1	解剖学第一講座	助教授	濤川一彦
		看護学講座	助教授	黒田 緑
		脳神経外科	講師	國本雅之
	17.6.1	内科学第二講座	助教授	伊藤博史
	17.6.10	泌尿器科学講座	教授	柿崎秀宏
昇任	17.6.16	産婦人科学講座	助教授	山下 剛
辞職	17.6.30	泌尿器科	講師	山口 聡
昇任	17.7.1	看護学講座	講師	荒ひとみ
	17.7.16	泌尿器科学講座	助教授	橋本 博
		泌尿器科	講師	佐賀祐司
		産科婦人科	講師	堀川道晴

窓外

保健管理センター助教授
川村 祐一郎

体育館とテニスコート

保健管理センターの小生の部屋から見える景色は、体育館の裏手である。その前の、グラウンドに続く小径を各種スポーツ用具を抱えて行き来する学生、また体育館の2階の用具室から顔を出す学生などの様子が見える。

一方、診察室の窓からは、ポプラ、シラカバなどの木立が眺められ、そこからテニスコートを垣間見ることが出来る。今年の夏は好天が続いた。9月上旬の今日は台風（14号）一過の残暑が漂い、テニスボールを打つ歯切れよい音が晴天を貫く。

現職に就き1年余りを迎えた。それまでは日常臨床のまっただ中におり、内科診療および研究に没頭していた感がある。学生との接触は、講義室か、病院という現場での実習がもっぱらで、まさに医科大学の、近々に医療職として世に出るべき学生に対する教官という意識であった。実は小生はバドミントン部の顧問を数年来続けており、もっと低学年の学生との接触もなかったわけではないが、コンパへの出席くらいで、何か世話をしたとか、指導をしたという実感ほとんどなかった。

今、冒頭に述べたような環境に身を置いてみると、ここはまさにキャンパスのまっただ中であり、「医科」という以前に「大学」であるなという、これまで、正確にいうと24年前の学生時代以来、あまり感じなかった一種の感慨に浸ることができる。学生の健康管理をする医師として仕事をしているわけではあるが、医学以外の話も、新入生を含めた多くの学生とするようになった。顧問としては、距離的に近くなったことも大きいが体育館へ練習を見に行く頻度が増え、また、たまたま昨年当大学が主管した東医体には様々の形で関与したつもりである。

忙しさは以前と変わらない。ただ、その質が変わってきたように思う。単調でない人生は視野が広がって興味深い。そんなことを考えながら再び窓外を眺める。

でも試験問題は手を抜かずにきちんと作りますよ（本稿執筆の段階ではまだだけど）。